福岡市

下和白塚原古墳群

— 山ノ下支群の調査 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第55集

福岡市教育委員会
No.
埋蔵文化財センター

1980

福岡市教育委員会

福岡市

下和白塚原古墳群

— 山ノ下支群の調査 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第55集

1980

福岡市教育委員会

序　文

市周辺部における都市化の傾向は止まるところを知らぬものがあり、これに伴い自然の景観も大幅に変容しつつあります。

今回の発掘調査は、このような人口の増加に伴う、児童生徒の急増に対処するため、55年4月に開校が予定されている市立和白丘中学校建設地内に所在する遺跡について、教育委員会が調査主体となり実施したものであります。

本書が市民各位の文化財保護思想育成に活用されると共に、学術研究の分野においても役立つことを願うものであります。

調査に際し、有益な助言をいただいた調査指導員の先生方をはじめ、地元ＰＴＡの皆様方及び関係各位の多大のご協力と、文化財に対する深いご理解に深甚なる感謝の意を表します。

昭和55年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　西津茂美

例　言

1．本書は福岡市教育委員会が計画した市立和白丘中学校建設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会文化課が1979年５月～６月に行った下和白塚原古墳群３基の調査報告書である。

2．本書の執筆には、山崎純男、山口譲治、松村道博、原　俊一があたり、各分担は文末に銘記した。

3．本書に使用した図の作製・製図には主に山崎、山口、松村、沢　皇臣、原、木下尚子、市橋重喜があたった。

4．本書の写真は、主に松村、沢によるものである。

5．本書の編集は山崎、山口が主に担当した。

本　文　目　次

第１章　序説……1
　1　はじめに……1
　2　下和白塚原古墳群山ノ下支群の位置……3
　3　塚原古墳群山ノ下支群とその周辺……3
第２章　調査の記録……7
　1　古墳群の立地と現状……7
　2　１号墳……9
　　(1)　墳丘……9
　　(2)　横穴式石室……12
　　(3)　遺物……14
　3　２号墳……19
　　(1)　墳丘……19
　　(2)　横穴式石室……19
　　(3)　遺物……25
　4　３号墳……32
　　(1)　墳丘……32
　　(2)　横穴式石室……32
　　(3)　遺物……35
第３章　総括……45
　1　石室平面図形の検討……45
　2　須恵器について……50
　3　ヘラ記号について……52
　4　古墳の築造年代と性格……56

付　表　目　次

Tab. 1　1号墳出土土器計測表…… 18
Tab. 2　2号墳出土土器計測表…… 31
Tab. 3　3号墳出土土器計測表…… 43
Tab. 4　山ノ下古墳群におけるヘラ記号の割合…… 54
Tab. 5　杯蓋、杯に見られるヘラ記号…… 56

図　版　目　次

〔本文対象頁〕

PL. 1　①　古墳群全景（発掘前）…… 6
　　②　古墳群全景（発掘後）…… 8
　　③　1、2号墳…… 9
PL. 2　①　1号墳全景（墳丘遺存状態）…… 9
　　②　1号墳墳丘断面…… 11
　　③　1号墳地山整形と石室…… 10
PL. 3　①　1号墳石室と閉塞状況…… 12
　　②　1号墳閉塞部（墓道側から）…… 12
　　③　1号墳閉塞部（石室側から）…… 12
PL. 4　①　1号墳石室と墓道…… 14
　　②　1号墳石室奥壁と床面…… 13
　　③　1号墳遺物出土状況…… 14
PL. 5　　1号墳出土遺物…… 14
PL. 6　①　2号墳全景（墳丘遺存状態）…… 19
　　②　2号墳墳丘断面…… 21
　　③　2号墳地山整形と石室…… 20
PL. 7　①　2号墳石室と閉塞状況…… 23
　　②　2号墳閉塞部（墓道側から）…… 23
　　③　2号墳閉塞部（石室側から）…… 23
PL. 8　①　2号墳石室全景（墓道側から）…… 22
　　②　2号墳石室全景（後方から）…… 22
　　③　2号墳石室奥壁…… 22
　　④　2号墳石室内遺物出土状況…… 25
PL. 9　　2号墳出土遺物…… 25
PL. 10　①　3号墳全景（墳丘遺存状態）…… 32
　　②　3号墳墳丘断面…… 34
PL. 11　③　3号墳地山整形と石室…… 33
PL. 11　①　3号墳石室全景…… 32
　　②　3号墳石室床面…… 32
　　③　3号墳石室奥壁…… 32
　　④　3号墳石室と墓道（墓道側から）…… 35
PL. 12　⑤　3号墳石室と墓道（後方から）…… 35
PL. 12　　3号墳出土遺物…… 35

挿 図 目 次

Fig. 1　周辺遺跡分布図…… 2
Fig. 2　古墳群の立地…… 4
Fig. 3　古墳群の位置と現況…… 6
Fig. 4　古墳群の墳丘遺存図…… 8
Fig. 5　1号墳掘り方および地山整形…… 10
Fig. 6　1号墳墳丘断面図…… 11
Fig. 7　1号墳閉塞部実測図…… 12
Fig. 8　1号墳石室実測図……12～13
Fig. 9　1号墳石室基底面実測図…… 13
Fig. 10　1号墳遺物出土状況図…… 14
Fig. 11　1号墳遺物実測図Ⅰ…… 15
Fig. 12　1号墳遺物実測図Ⅱ…… 17
Fig. 13　1号墳遺物実測図Ⅲ…… 18
Fig. 14　2号墳掘り方および地山整形…… 20
Fig. 15　2号墳墳丘断面図…… 21
Fig. 16　2号墳石室実測図…… 22
Fig. 17　2号墳閉塞部実測図…… 23
Fig. 18　2号墳石室基底面実測図…… 24
Fig. 19　2号墳遺物出土状況図…… 25
Fig. 20　2号墳遺物実測図Ⅰ…… 26
Fig. 21　2号墳遺物実測図Ⅱ…… 28
Fig. 22　2号墳遺物実測図Ⅲ…… 29
Fig. 23　2号墳遺物実測図Ⅳ…… 30
Fig. 24　3号墳掘り方および地山整形…… 33
Fig. 25　3号墳墳丘断面図…… 34
Fig. 26　3号墳石室実測図……34～35
Fig. 27　3号墳石室基底面実測図…… 35
Fig. 28　3号墳遺物出土状況図…… 36
Fig. 29　3号墳遺物実測図Ⅰ…… 37
Fig. 30　3号墳遺物実測図Ⅱ…… 38
Fig. 31　3号墳遺物実測図Ⅲ…… 39
Fig. 32　3号墳遺物実測図Ⅳ…… 40
Fig. 33　3号墳遺物実測図Ⅴ…… 41
Fig. 34　各古墳石室平面図…… 45
Fig. 35　2号墳石室の方眼による操作結果…… 46
Fig. 36　1、3号墳石室の方眼による操作結果…… 47
Fig. 37　1～3号墳石積み状況一覧図…… 49
Fig. 38　蓋、杯の分類…… 50
Fig. 39　1～3号墳出土須恵器ヘラ記号…… 53

第1章　序　　説

1. はじめに

1978年、市立和白丘中学校建設が具体化し、福岡市教育委員会管理課より文化課に埋蔵文化財の調査依頼があった。文化課では建設予定地内に3基の古墳を確認した。開校が1980年4月と決まっており、擁壁工事も進んでおり現状保存は困難であるため、造成を一時ストップして、記録をとるための発掘調査を実施した。

発掘調査は、1979年5月21日～6月23日の1ヶ月間行った。調査に当っては、教育委員会管理課、河本建設をはじめ地元各氏より多大なる協力をたまわった。記して感謝の意を表したい。

調　査　関　係　者

福岡市教育委員会

	教育長	西津茂美
	施設部長	徳田信久
	管理課長	今林秀夫
	用地係長	中島秀夫
	文化部長	志鶴幸弘
	文化課長	井上剛紀
庶務会計	埋蔵文化財第1係長	三宅安吉
		古藤国雄
	発掘調査	山崎純男、沢皇臣
		山口譲治、松村道博
	補助員	原俊一、木下尚子
		市橋重喜（九州大学）

調査協力者　　河本建設、福島建設

谷口泰子、吉田豊子、山本恵津子、早野和子、渕上雅子、北野公子、山下節子、迎田みどり、若元南子、杉本真由美、川路トシ子、馬場保津美、石田和子、杉本冨紗子、鹿毛道子、水間晶子、西美智子、隈部アサ子、小城絹子、菊池紘美、今井立子、花田キヌ子、今村伊洋代、吉田純子、小川キク枝、白石靖子、中山由紀子、木下佳子、民本美智子、志鶴千恵子、尾崎道子、平野光子、園田浩子、西田典子、松本秀子、京屋ますみ、白石ますえ、吉牟田初子、石田良子、泉凱子、八尋ハル、國武操

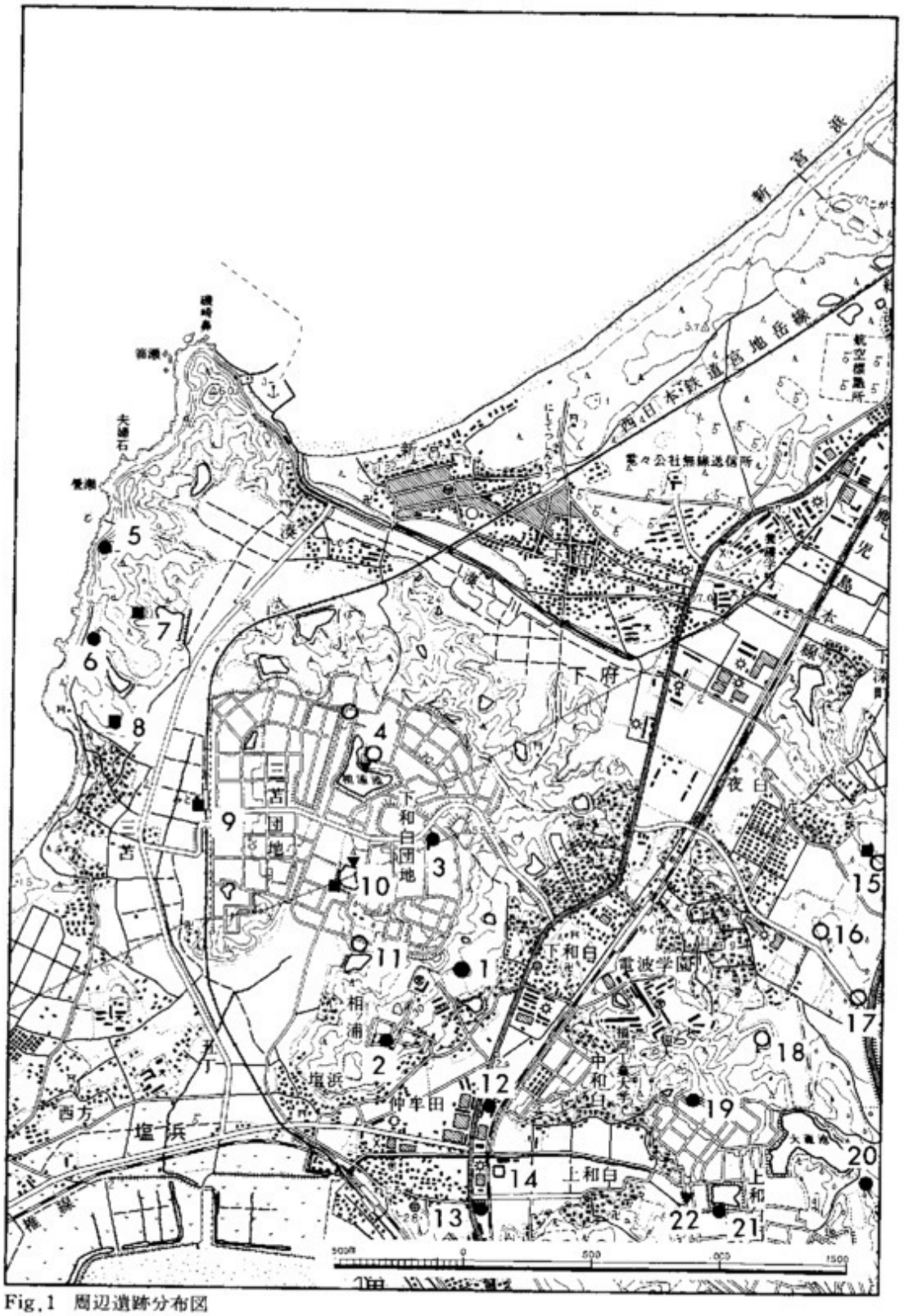


Fig.1 周辺遺跡分布図

2．下和白塚原古墳群山ノ下支群の位置

下和白は、福岡市の東北部で玄界灘と博多湾を南北に分ける志賀島へ連なる海の中道のつけ根部に位置し、粕屋郡新宮町と接している。この地域は、福岡平野の東を限る三群山地の支脈犬鳴山、立花山（標高367m）山系の低丘陵が玄界灘・博多湾に向っていくつも延びている。下和白の中心部・美和台（標高54.80m）は、立花山系から派生した低丘陵と国道3号線、国鉄鹿児島本線を挟み対峙し独立丘状となっている。

美和台は、硅化木等を含む第三紀層を基盤とする径1200mの丘で、東部、南部に向って多くの舌状台地が派生している。美和台の頂部には消滅しているが飛山古墳群（3基）[1]が、東南部に派生した舌状台地には塚原古墳群[2]が分布している。

今回調査を行った3基の古墳は、美和台から東に派生した舌状台地の標高20mラインの南斜面に分布している。西側から1～3号墳とし、3基とも両袖単室横穴式石室を内部主体とする古墳で南に向って開口している。

南は鞍部を挟んで消滅しているが塚原古墳群となっている。今回調査を行った3基の古墳の地籍は東区大字下和白山ノ下702番地で、東に向って派生している舌状台地に位置していることから下和白塚原古墳群山ノ下支群とした。

註1　柳田純孝他『福岡市和白遺跡群発掘調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第18集・1971年

2　福岡市教育委員会『福岡市埋蔵文化財遺跡地名表(総集編)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集・1971年

3．塚原古墳群山ノ下支群とその周辺

下和白は前述したように福岡市の東北部で志賀島へ連なる海の中道のつけ根部にあたる。福岡市内及び周辺地域は住宅化が進んでおり、下和白も例にもれず下和白・三苫両マンモス団地がある。この地域は『筑前続風土記』によると裏粕屋郡下和白村である。また『和名抄』によると粕屋郡内に香椎・志阿・厨戸・大村・池田・柞原・勢門・敷梨・安雲の9郷があり、この一帯は安雲郷に属している。しかし、下和白地区で発掘調査が実施されたのは、今回が2回目である。ここで下和白及び周辺の遺跡についてみていくことにする。

古い方からみていくと1970年度に発掘調査が実施された下和白遺跡（4）で比較的大形の三稜尖頭器が出土している。この器種は先土器時代ナイフ形石器文化期から縄文時代初頭まで使われており、必しも先土器時代の石器とはいえない。周辺地域では雁ノ巣砂丘遺跡・粕屋郡古賀町佐谷脇山遺跡でナイフ形石器が出土しており、先土器時代ナイフ形石器文化期にはこの一帯に人が住んでいたことが分る。また古賀町鹿部山遺跡では細石刃核が出土している。縄文時代に入ると古賀町水上遺跡で後期の土器が出土しており、志賀海神社口遺跡でも後期から晩期の土器が出土している。下和白遺跡・上和白遺跡（22）では石匙等の石器が出土している

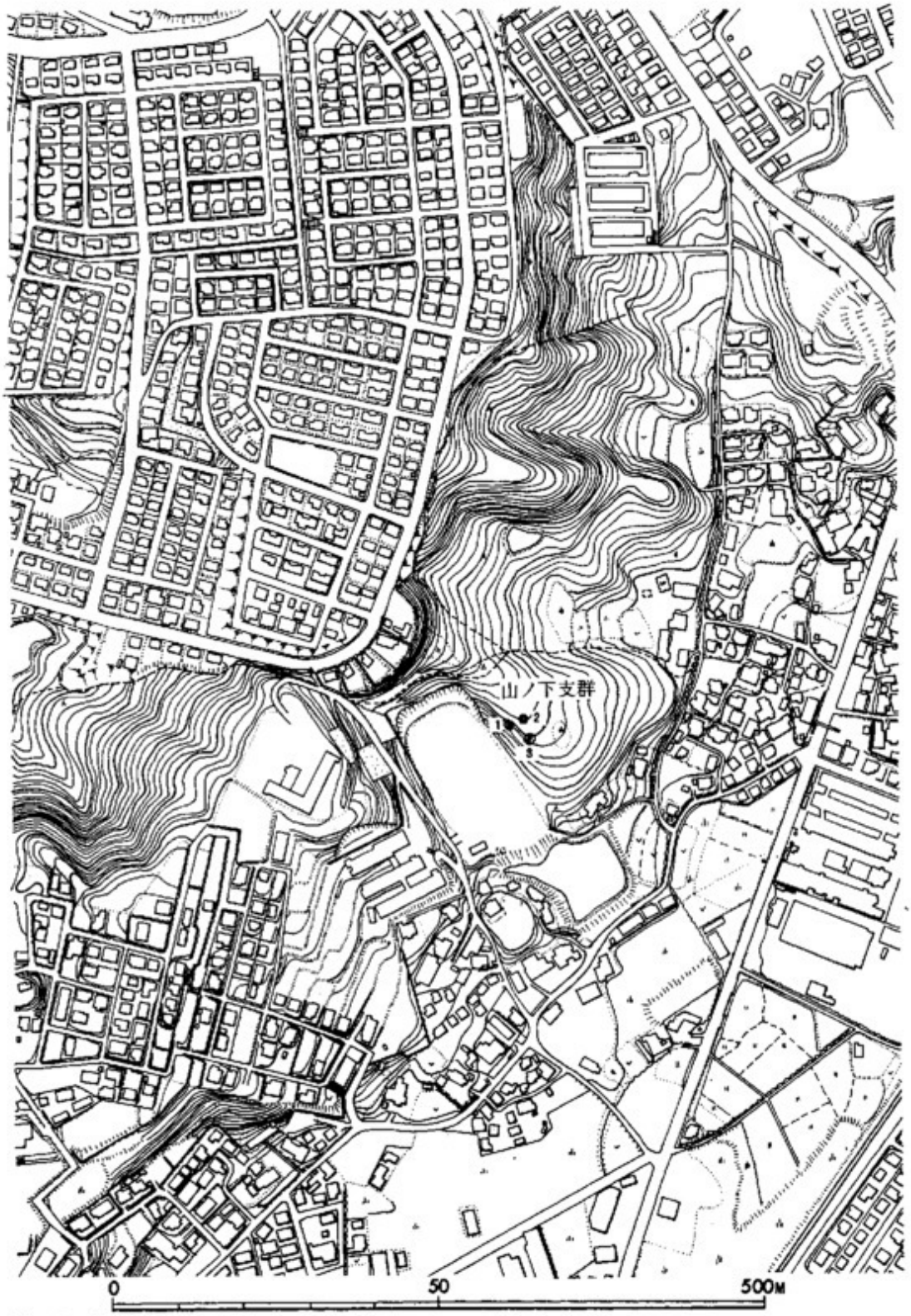


Fig.2　古墳群の立地

が、土器の出土がなく確実性はないが縄文時代のものと考えられる。先土器時代から縄文時代の遺跡は稀薄であるが、新宮町下ノ府遺跡で縄文式土器（後期初頭）が採集されており今後の調査に期待したい。

縄文時代終末期から弥生時代になると、この地域でも比較的まとまった遺物を出土している遺跡がある。土器型式設定遺跡・新宮町夜臼遺跡（16）は今回調査区の東北東約1.6㎞にあたる。夜臼遺跡・立花貝塚（15）では、縄文時代終末期の夜臼式土器が出土している。一昨年の板付遺跡G－7a、b区の調査において、突帯文土器の単純層があり、高度の水稲耕作技術をもつ水田址が確認された。福岡平野部から遮断されたこの地域の同時代の文化が水稲耕作をもっているか否かは今後の課題といえよう。下和白遺跡では弥生時代中期前半から終末期の土器が出土している。周辺では古賀町鹿部山遺跡で前期から後期のまとまった遺物が出土している。弥生時代に入ると水稲耕作技術をもち谷水田も形成されている。立花山から派生する丘陵に位置している夜臼遺跡等や古賀町に分布している諸遺跡は、水田可耕地をもっている。しかし上和白遺跡や志賀島の勝馬遺跡等の諸遺跡は、平野部と異なった生産様式を考えていかねばならないだろう。

美和台から南の塩浜にかけては塚原古墳群（２）が分布している。今回調査区（山ノ下支群）及び調査区の北の丘陵は旧状を保っているけれども、南の丘陵は住宅化している。山ノ下支群は前述したように下和白団地の南部で東に延びている丘陵の南斜面に築造されている、両袖単室横穴式石室を内部主体とする３基の後期古墳群である。塚原古墳群の大部分が来調査で破壊されており山ノ下支群の古墳群における位置等諸関係がつかめないのは残念である。

周辺の後期古墳は、三苫の三苫古墳（５）・京塚古墳（６）・中和白の中和白古墳(12)・丸山古墳（13）・上和白の上和白古墳群・ゴルフ場古墳群・西戸崎の大岳古墳・新宮町のかまど古墳・平山古墳群・三代古墳・古賀町の鹿部山唐ヶ坪古墳群・浦口古墳群等がある。三苫・京塚古墳は美和台の北西部に位置し、大岳古墳は西戸崎の独立丘に位置する１基のみの古墳であり、中和白・丸山古墳は美和台と立花山から派生している丘陵との鞍部に位置している。立花山から派生している丘陵地域には、猿の塚古墳・３基の宮前群・４基の高見Ａ群・高見５号墳からなる上和白古墳群のような古墳群が形成されている。

後期古墳に先行する古墳としては、粘土槨を内部主体とする香椎の香住ヶ丘古墳・美和台の頂部附近に位置する竪穴・竪穴系横口式石室を内部主体とする飛山１・２号墳（３）がある。鹿部山遺跡群浦口４号墳等も竪穴系横口式石室を内部主体としている。

美和台には、飛山古墳群（３基）・塚原古墳群（山ノ下支群３基＋α）・三苫古墳・京塚古墳があり、古墳時代の遺物散布地もあるが、大岳古墳と同様水稲可耕地をもっていない。水稲耕作と異なった生活基盤をもつ集団を考えていかねばならないだろう。

（山口）

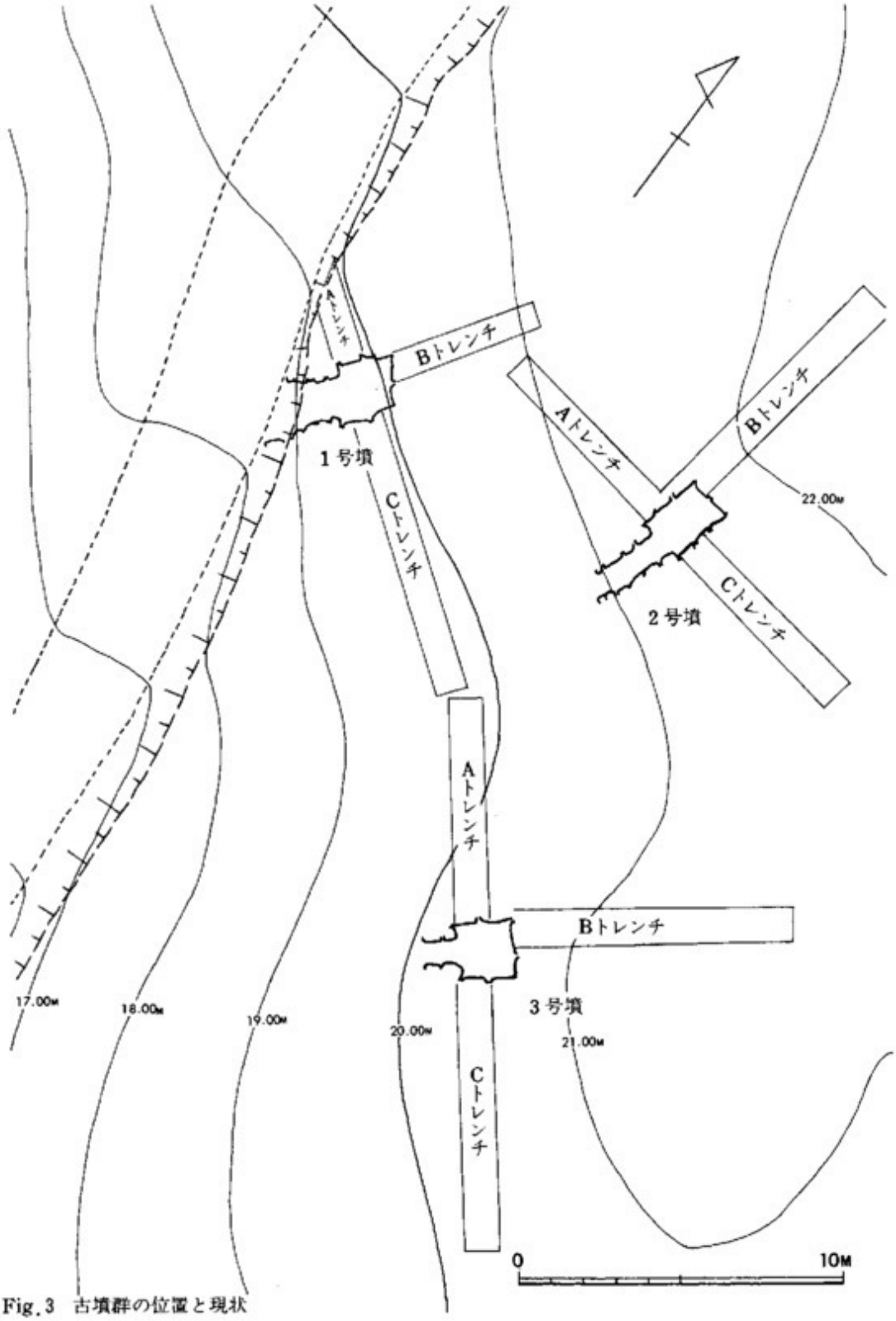


Fig. 3 古墳群の位置と現状

第2章　調査の記録

1．古墳群の立地と現状

福岡市東区大字和白字山ノ下に位置する。下和白団地の占地する丘陵は南北に尾根が走り、独立丘陵となっている。それから四方に多数の低丘陵を派生せしめている。それらの丘陵の中で南東へ延びた低丘陵のほぼ中央部に占地し、下和白団地の丘陵頂部より急峻な傾斜をもった丘陵が少し平坦になり、さらに傾斜を強めて、旧3号線へと延びる。本古墳群はその平坦な丘陵の南西斜面にある。平野部との比高差は約15mを測る。

古墳群は3基の円墳からなり、互いに墳丘裾を相接するような状態で構築されている。

前述したように、平坦な丘陵上にあるが、さらに詳述すれば、北西から南東にのびる舌状低丘陵の西斜面、標高19～22mに位置する。この丘陵は南西部は幅広い浅い谷で区分され、さらに北東部には深い谷を有し、低丘陵の割には比較的高低差を感じさせる。しかしながら調査着手時には古墳の立地する地区を除いて学校建設工事が行われ、自然景観が破壊されていた。また下和白団地の丘陵も南東部の急峻な地形を残して、他の地区は宅地と化している。

古墳番号は北西部から南西部に向って1、2、3号墳とした。1号墳と3号墳は南東に延びる丘陵の南西斜面にあり、その間の等高線が弓状に弯曲し、その奥に2号墳がある。

1号墳は墳丘の南西部を工事用仮設道路により削平され、1mの段差をもつ。閉塞石の一部が露出し、墳丘中央部もかん没し、天井石も存在しておらず、遺存状態は良好ではなかった。南側部分は浅い谷状地形を有するため、急峻な傾斜となる。北西～東側にかけて自然の地形と墳丘の界は不明瞭な部分が多いが、一部には凹部を形成し、明瞭な部分も存在する。全体に周辺の地形により少し高い程度であり、墳丘の遺存は悪く、見かけの墳丘の高さは約1mを測るにすぎない。また2号墳とは東側で裾部を接している。

2号墳は1号墳の東側に隣接しており、丘陵先端より少し西寄りに位置し、1号墳より1.5m位高い所にある。石室の中央部は試掘時のトレンチにより積石の上部が破壊されていた。南西～北東部にかけては谷状地形に望み明瞭な墳丘を遺存しているが、他の部分は周辺部より少しの高まりがある位で、見かけの墳丘の高さは約1mを測る。明瞭な墳丘は形成されていない。とくに北～東側にかけてはほぼ平坦であり、発掘調査によらなければ、墳丘裾の現状確認は困難であった。

3号墳は2号墳の墳丘裾を南へ2.6mの距離にある。北東から南西に向ってのゆるやかな斜面にあり、標高は1号墳と2号墳の中間に位置する。西～南にかけては急峻な斜面を形成し、明瞭な墳丘を見せるが、北～東側部分はほぼ平坦である。見かけの墳丘の高さは約1mを測る。

（松村）

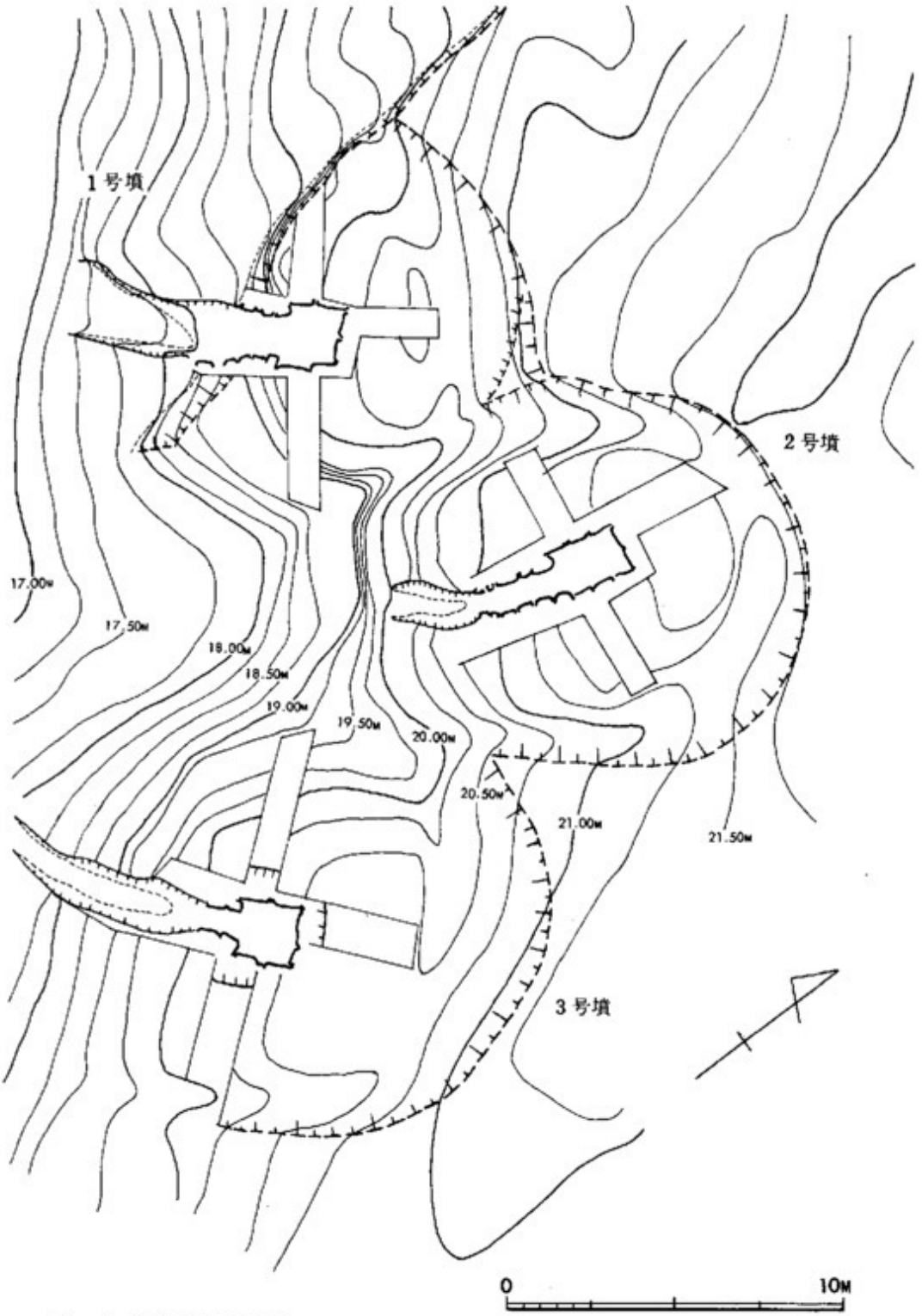


Fig.4　古墳群墳丘遺存図

2．1号墳

(1) 墳　　丘

地山整形（Fig.5） 本墳は古墳群中最も谷の奥に位置する。石室は丘陵斜面の等高線にほぼ直交して構築される。したがって、古墳築造に伴う地山整形は、丘陵斜面の高い側を馬蹄形に半周する溝の掘削と、その内側、つまり墳丘基底面の整地という二つの作業工程をふくむ。

馬蹄形溝は約14°の傾斜で下る斜面の標高21mほどを上端として、傾斜にそって削り出している。その範囲はⅠ区が、ブルドーザーの掘削によって消失しているため不明であるが、全周するものではない。溝外端の南北幅12m、内端幅8m程度である。

溝は傾斜に沿って掘られており底面のレベル差が著しい。最も高い部分で20.5m、Ⅳ区の最も低い部分で18mを測り約2.5mの差がある。溝の断面形も部分的に異なり、最も高い部分（Bトレンチ）ではレベル差はなくテラス状になる。そこより下るにつれて溝の深さも徐々に増していくが、基本的には浅い皿状の断面形をなす。溝幅約1.2mである。

溝の内側は前述したように平坦に整地されている。傾斜にそって北から南にゆるやかに下るが東西方向は水平であり、墳丘基底面には古墳築造前の地表の痕跡は認められない。

なお、この一連の地山整形の段階で2号墳の馬蹄形溝を切断破損している。このことは1号墳の築造が2号墳より後出であることを示している。

墳　丘（Fig.6） 墳丘は溝内側の整地面を基底にして盛土を行っているが、一部において墳丘盛土端部が溝内にあるところがみられ、必ずしも溝内側から盛土を行ったものとはいえないが、大略の一致は認められる。

本墳の場合、盛土の流失が著しく、遺存状態が悪く、最も良好な部分で高さ0.75mを残しているにすぎない。そのため盛土の過程を明らかにするのは困難であるが、次の二段階の工程が看取できる。1段階は石室構築における壁石の裏込め的なもので、壁石の積み上げに平行して、一段ずつ（約10cmの厚さ）強く叩きしめながら盛り上げるが、その範囲は石室掘り方を大きく越えない。第2段階は天井石の被覆と墳形を整えるものと考えるが、墳裾部にわずかに残っているにすぎない。この段階の盛土は第1段階の盛土に比較しあまり硬くしまっていない。墳丘の遺存高は石室奥壁部で基底面から2mであるが石室正面からの見かけの高さは2.5mほどになる。

墳丘平面形は、Ⅰ、Ⅱ区が削られているため不明だが、Ⅲ、Ⅳ区では裾線は半円形をなす。その規模は南北8m、南側の墳裾部を墓道と墓坑の墳界におけば東西約7.8mになって、径約8mの円形に近い平面形と推測される。

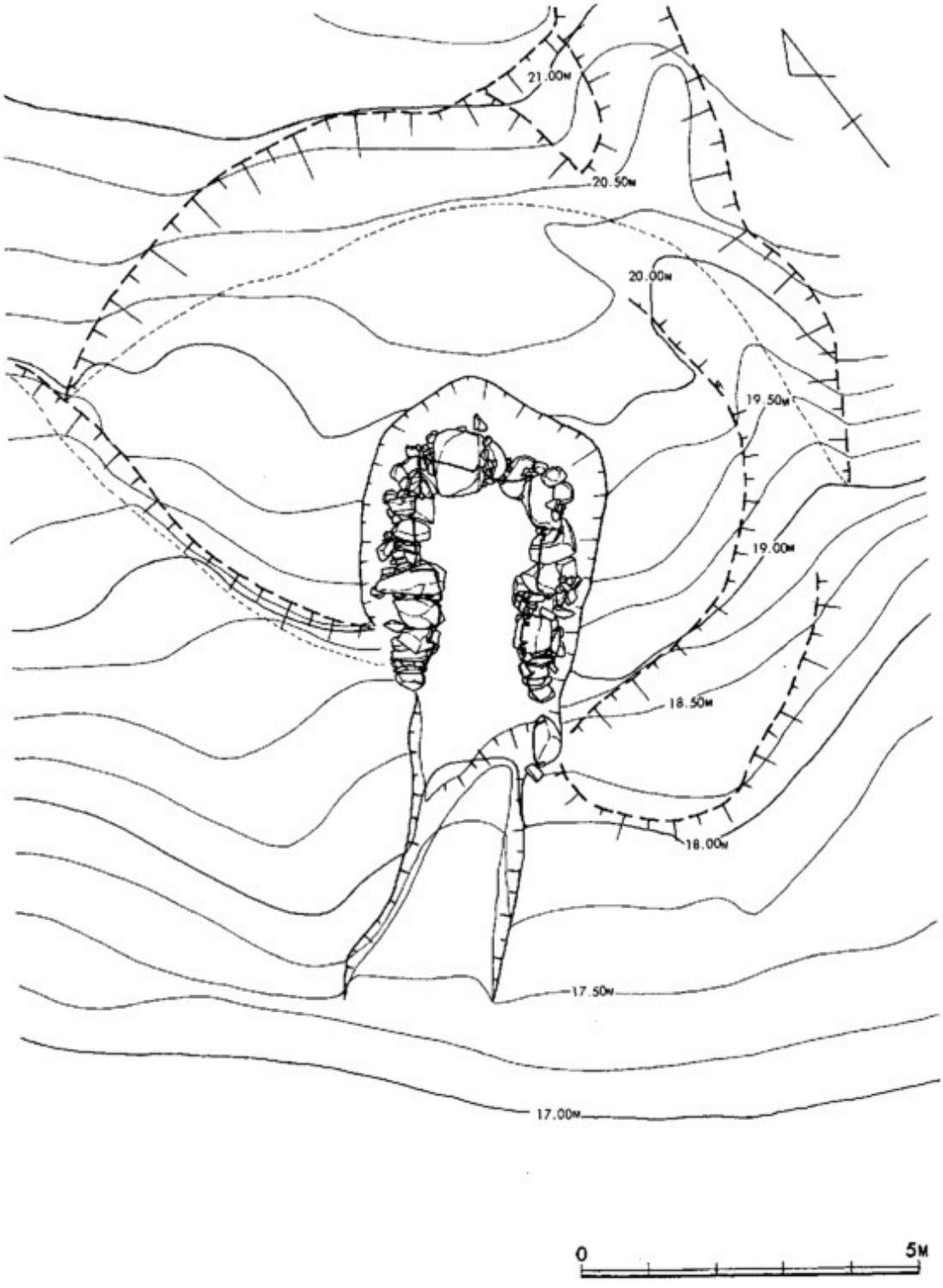


Fig.5　１号墳掘り方及び地山整形

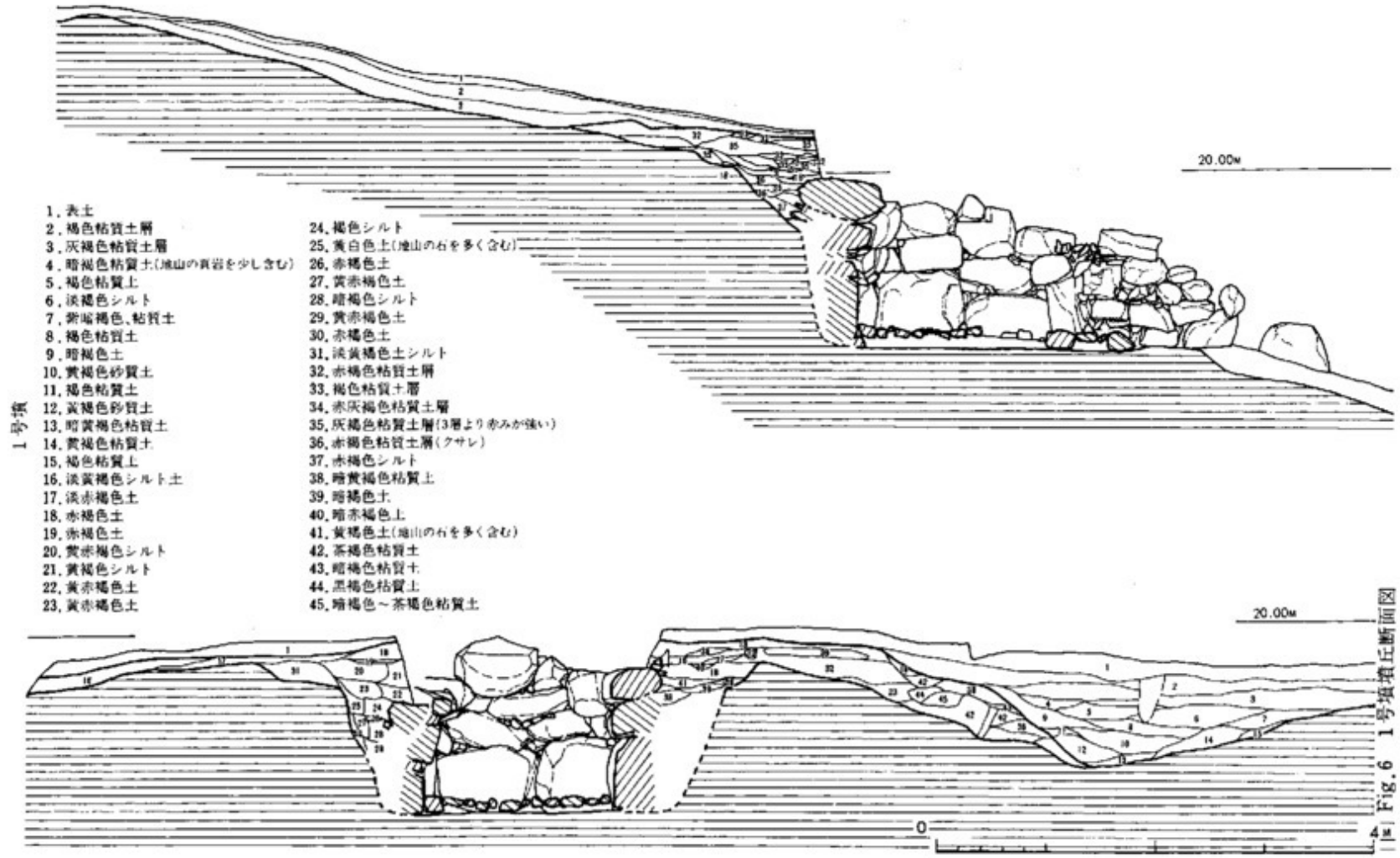


Fig. 6 1号墳墳丘断面図

(2)　横穴式石室（Fig. 8）

本墳の埋葬施設は主軸をＮ－30°－Ｅにとり、南西に開口する単室の両袖型横穴式石室である。天井部はすでに失われ、側壁上半部の崩壊による石材、流土によって完全に埋没していた。また羨道部は工事用道路の掘削により、左側の羨道部の前半部、右側羨道の一部が破壊されていた。

石室は深い掘り方内に構築され、羨道前面には更に墓道が連接される。石室の平面形は方形であるが歪みが著しい。羨道部はやゝ幅広で長い。現存する石室長は右壁4.18ｍ、左壁で3.39ｍを測る。右壁はほぼ完全であるので右室長は4.20ｍ程度であろう。

石室を構成する石材は大部分が花崗岩で、一部、地山に含まれる硅化木が敷石に使用されている。

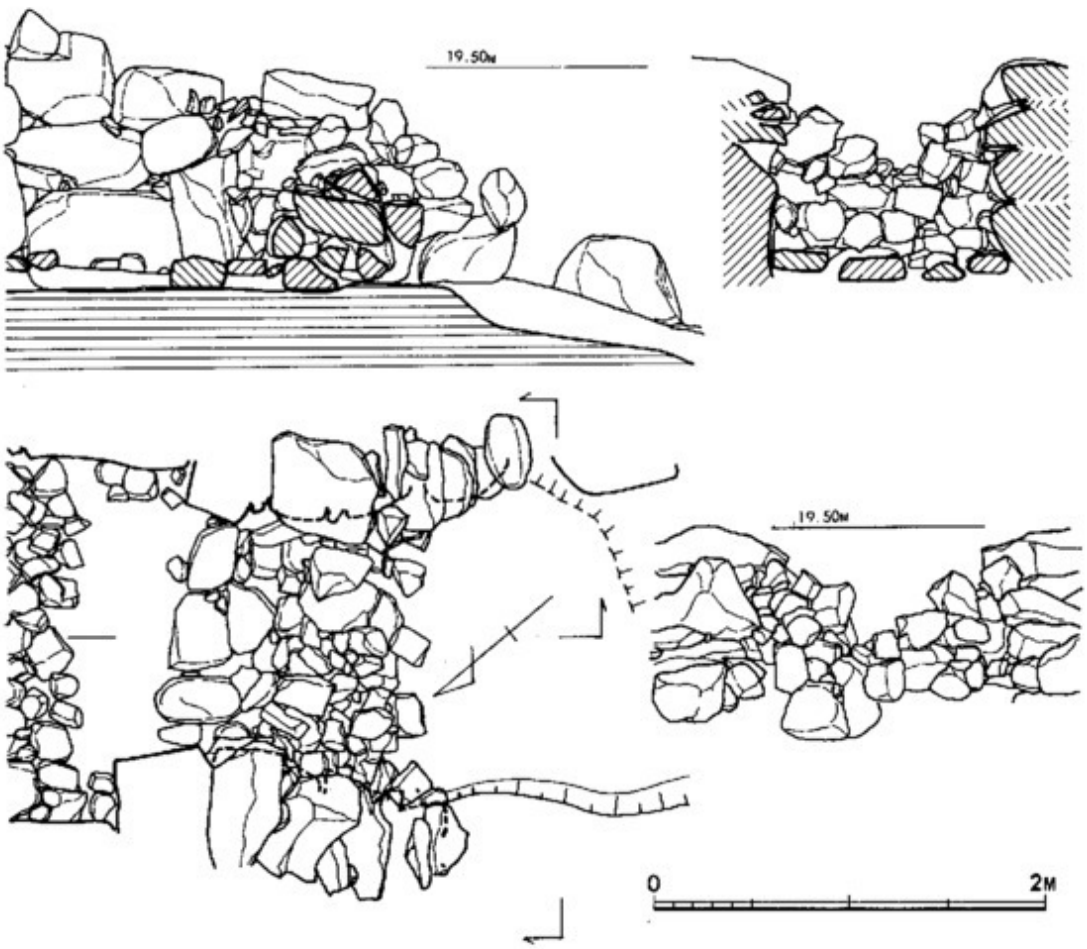


Fig.7　１号墳閉塞部実測図

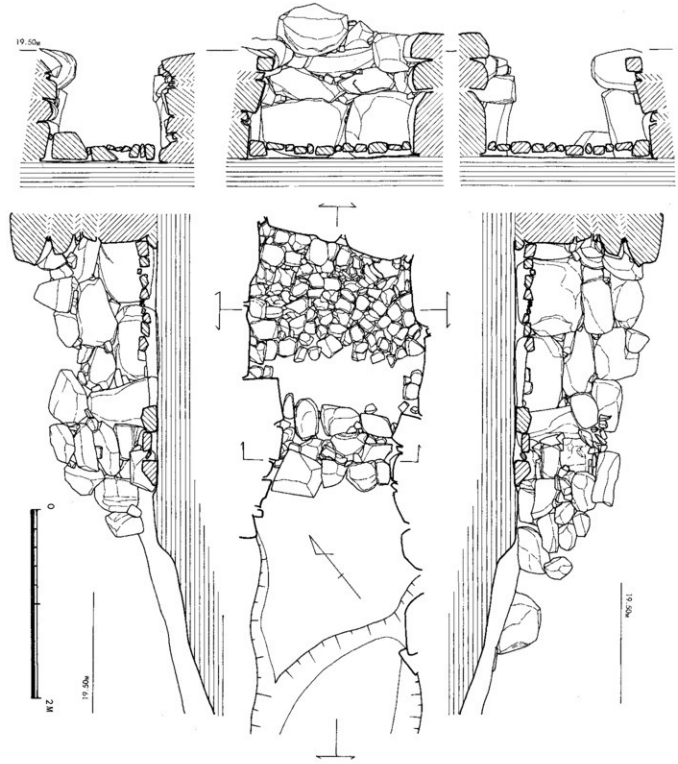


Fig. 8　1号墳石室実測図

石室掘り方　墓坑は墳丘を完全に除去し観察することができたが、土質の判別が困難な部分があり不明な部分もある。また、石室と掘り方の間が狭く完掘できなかった。

墓坑は地山整形された部分のほぼ中央に垂直に近い角度で掘り込まれたもので、深さは石室奥壁部で1.6ｍであるが、整地面の傾斜に沿って順次浅くなり羨道と墓道の境界では0.5ｍとなる。掘り方の平面形は隅丸の不整長方形で、長軸６ｍ、奥壁部で3.5ｍ、羨道部と墓道の境界で３ｍを測る。石室腰石は掘り方内いっぱいに配置され、腰石の配置にあたっては、一部は掘り方底部を更に一段掘り込み安定を図っている。

閉塞施設（Fig.7）羨道部中央からやや玄室寄りに第１梱石を根石とした閉塞施設が存在する。転石を積み上げて閉塞するもので現存高0.7ｍである。閉塞施設の位置は墓道側で奥壁中央から2.9ｍ、羨道内側では第１梱石を根石として奥壁中央部から2.20ｍで、その間約0.7ｍである。墓道側からみた場合、石積みは雑然とした状態であるが、内側では整然とした石積みの状態で組み上げられている。下部に大きな石、上に行くにしたがい小さい石が使用される。

玄　　室　奥壁幅1.60ｍ、前壁幅1.85ｍ、右壁長1.65ｍ、左壁長1.62ｍを測る。左右の壁線は多少の凹凸があるが、ほぼ直線をなす。前、後壁ともに右壁側が前方に突出し、平面形は歪みの大きい方形をなす。

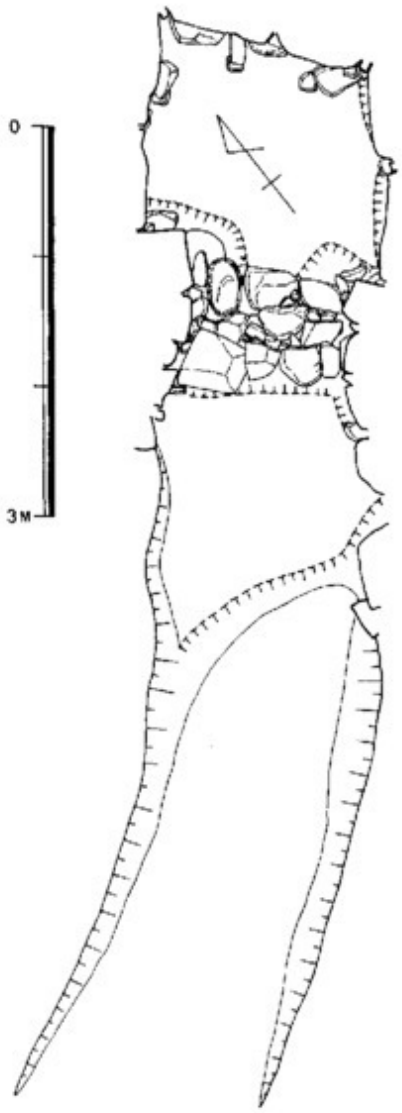


Fig.9　１号墳石室基底面実測図

壁体の構築法は各壁面に類似した手法が用いられる。奥、右、左壁共に２石の大ぶりの転石を立て腰石としている。腰石から上方はやや大きめの転石・割石を水平方向に目路が通るように横積みしている。左右側壁および奥壁では腰石を垂直に立て、その上の石から持ち送りにして内傾させている。奥壁と両側壁の隅角は腰石部では奥壁を側壁が挟み込むように接合し、腰石から上方は互いに重なる力石の使用がみられる。天井石はすでになく、周壁の状態からすれば周壁の現存高（床面より1.5ｍ）よりさらに上部で架構されたと思われる。

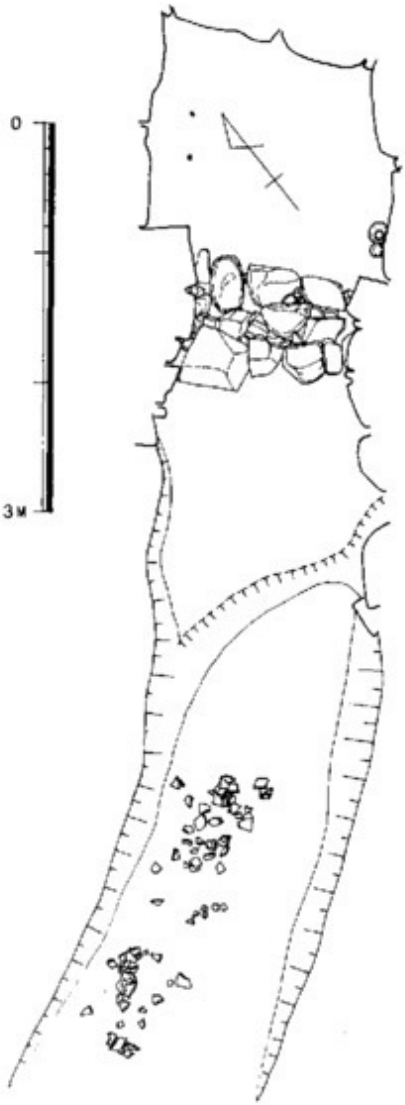


Fig.10　１号墳遺物出土状況図

玄門部は素型の両袖を配するだけで特別の造作はない。左袖幅0.4m、右袖幅0.3mを測る。前壁はすでに失われていてその構造は不明である。袖右上の壁石は奥壁の隅角と同様に力石の使用が認められる。

床面は比較的良好な状態で残存していた。玄室前半部の約0.5m幅の範囲に敷石が存在しないが、これは攪乱によって消失したものでなく、もともとこの範囲には敷石の存在はなかったと考えられる。敷石は径10～30cmの扁平な転石を主に使用し、一部に割石を含む。石材は花崗岩が大部分であるが、まれに硅化木が使用される。

羨　道　前半部の一部をブルトーザーの掘削によって失っている。羨道長は左壁で1.70m、右壁で2.54mを測る。奥幅は第２梱石の部分で1.25m、墓道側、閉塞部前面で1.5mを測り口がかなり開く羨道である。壁体の構成は玄室と同様で、やや大ぶりの石を立て腰石とし、その上に転石を目路が通るように横積みにしている。持ち送りは顕著でなく、ほぼ垂直にたつ。

床面には２ヶ所に形ばかりの梱石が配される。第１梱石は４個の転石を組み合せて閉塞石の根石としている。第２梱石は３個の転石を配する。奥壁中央部からその前面までの距離はそれぞれ2.67mと2.05mを測り、第１梱石と第２梱石間は約0.3mと狭く形ばかりとなる。またこの間には敷石がみられる。前半部の床面は直接地山で、羨道端で急に傾斜をもち墓道に接続する。

墓　道　現存長約４m、幅1.7～1.9mで、断面は逆台形をなす。平面形は石室主軸よりしだいに西にゆるくカーブしている。削平のため浅くなっているが約20～30cmの深さで先端部は急傾斜によって消失している。埋土内より土器が若干出土している。（山崎）

(3)　遺　　物

出土状況（Fig.10）遺物は石室内、墓道Ⅳ区墳丘裾から出土した。玄室内は盗掘を受けてはいるが、ほぼ当初の状態をとどめていた。玄室後半部の敷石部の左壁に近い部分で金環２個、

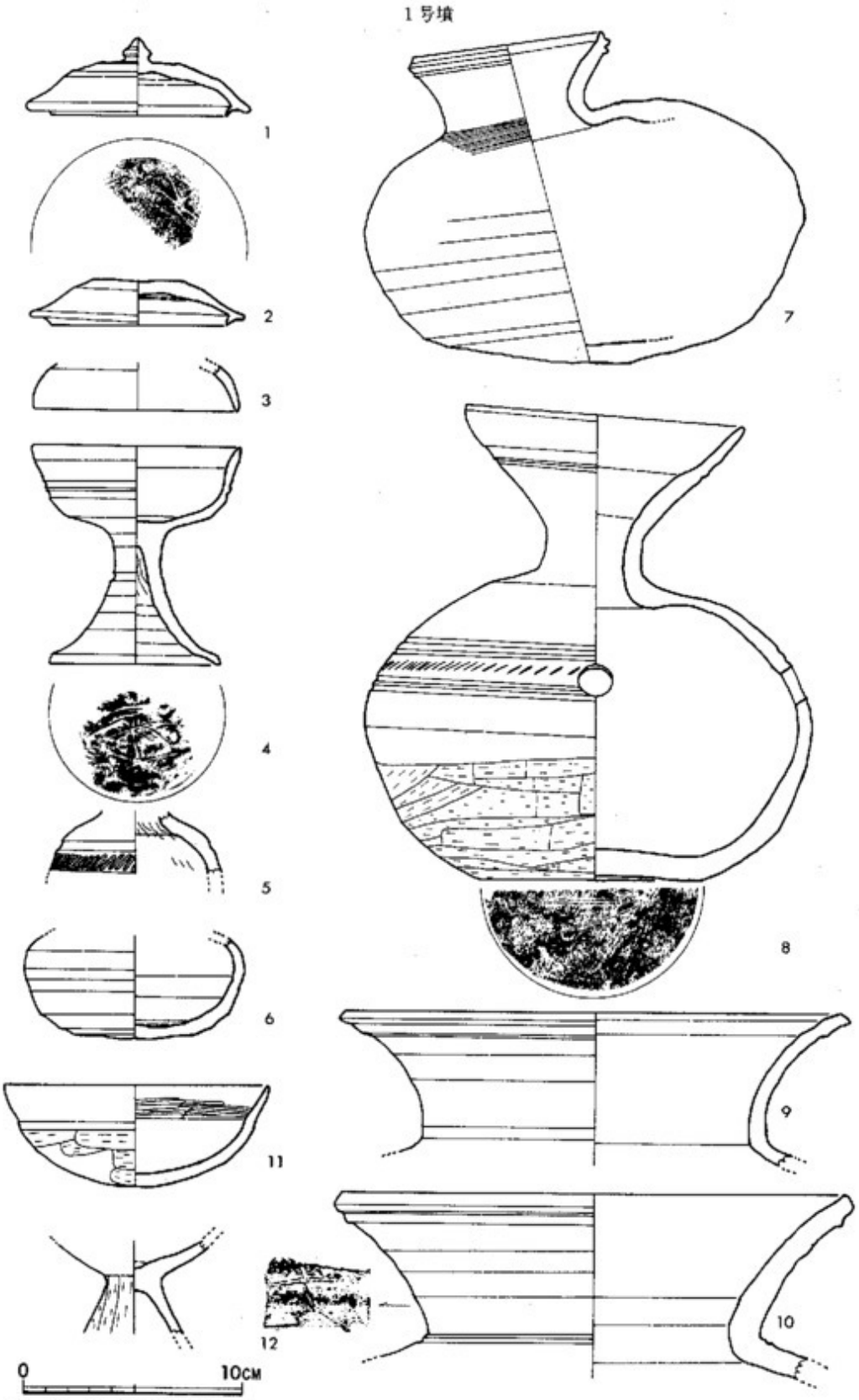


Fig.11　1号墳遺物実測図 I

銀環１個が出土した。金環は一対で間隔は30cmで着装されていた状態である。銀環は金環よりわずかに離れた奥壁側に検出した。この状態から頭位を左壁（北）に遺体が安置されたと推測できる。

玄室右壁の玄門部隅角に平瓶（７）と土師器椀（11）が各１点出土した。

墓道には破砕された状態で須恵器、土師器が出土したが、層位的に分離はできない。墓道出土の遺物は須恵器の甕（９、13）鉢（５、８）高杯（４）壺（６）土師器高杯（12）で、須恵器が多数を占める。Ⅳ区墳丘裾からは須恵器杯蓋（１～３）甕（10、14）が出土しているが、これらは元来は墳丘上に置かれていたものが盛土の流失に伴い転落したものと考えられる。（山崎）

須　恵　器

杯蓋（Fig.11－１～３）　４個体出土し、１点が完形品。全て墳丘（Ⅳ区）からの出土である。内面のかえりをもつもの（Ⅰ類）と、もたないもの（Ⅱ類）との２類に大別し、さらにⅠ類はつまみの有無によってａ、ｂ類に細分する。

Ⅰａ類（Fig.11－１）　完形品で宝珠形つまみを有し、内面のかえりは口端部より少し出て、端部は尖り気味。天井部は右回りのヘラ削り。

Ⅰｂ類（Fig.11－２）　天井部は平坦で、体部との境は明瞭。器高は低く、内面のかえりは口端部より下方に出て、端部は尖り気味。天井部にヘラ記号をもつ。

Ⅱ類（Fig.11－３）　破片で２個体出土し、口縁部は内弯気味で口端部は丸い。

高杯（Fig.11－４）　完形品である。口縁部は外傾し、体部には２条の沈線を施す。脚部は杯部との接合部の器壁が厚く、外傾しながら下方に開き、脚端部は下方に引き出されて丸みをもつ。脚部上半に一条の沈線、内面にはしぼりの痕跡。脚部内面にヘラ記号。

鉢（Fig.11－５・８）　２個体出土し、大小２類に分ける。

Ⅰ類（Fig.11－５）　体部上半の破片で、平行する２条の沈線がめぐり、その間に左下がりの櫛描列点文が施される。頸部の内面にはしぼりの痕跡が認められる。

Ⅱ類（Fig.11－８）　大型のもので完形品。細い頸部から大きく外傾して立ち上がる口縁部が内弯気味で端部は丸い。体部は球形に膨み、底部は上げ底気味である。口頸部には２条の沈線、体部の最大部より上に直径1.5cmの焼成前穿孔があり、穿孔部をはさむように上下に２条づつの沈線とその間には左下がりの刻みが施されている。体部下半は静止ヘラ削り、口頸部に自然釉が認められる。底部にヘラ記号。

壺（Fig.11－６）　体部下半の破片で、底部は丸底気味の平底。右回りのヘラ削りによる調整が見られる。

平瓶（Fig.11－７）　完形品で玄室内出土である。頸部は短かく外傾し、口端部は上方に引き出されて丸くおさまり、端部下は段をもつ。底部はヘラおこし後未調整で、体部上半にはカキ目調整、体部下半は右回りのヘラ削り。

甕（Fig.11－９・10　Fig.12－13・14）

９は頸部が外傾して立ち上がり、口端部はコの字形で直下には弱い段をもつ。10は器壁が厚く、頸部は外傾して立ち上がり、口端部はコの字形で直下は小さな段をもつ。頸部と体部との境は明瞭で、体部最上部には一条の沈線がめぐる。体部内面は同心円文。頸部にヘラ記号。13は短かい頸部が強く外反し、口端部は丸みをもつ。体部は頸部との境が強くなでられて少し凹む。体部は大きく膨らみ、体部内面の上半には粘土継ぎ目が明瞭である。頸部及び体部内面のヨコなで調整は顕著である。体部外面は格子目タタキ。14は完形品である。頸部は短かく、外傾して立ち上がり、口端部は稜をもつ、口端部外側は少し張り出す。体部と頸部との接合部はやや肥厚し、体部から底部へは長胴形に膨み、底部は丸底。口頸部はヨコなで調整、体部外面は疑似格子目タタキ。内面には一部刷毛目調整を認める。

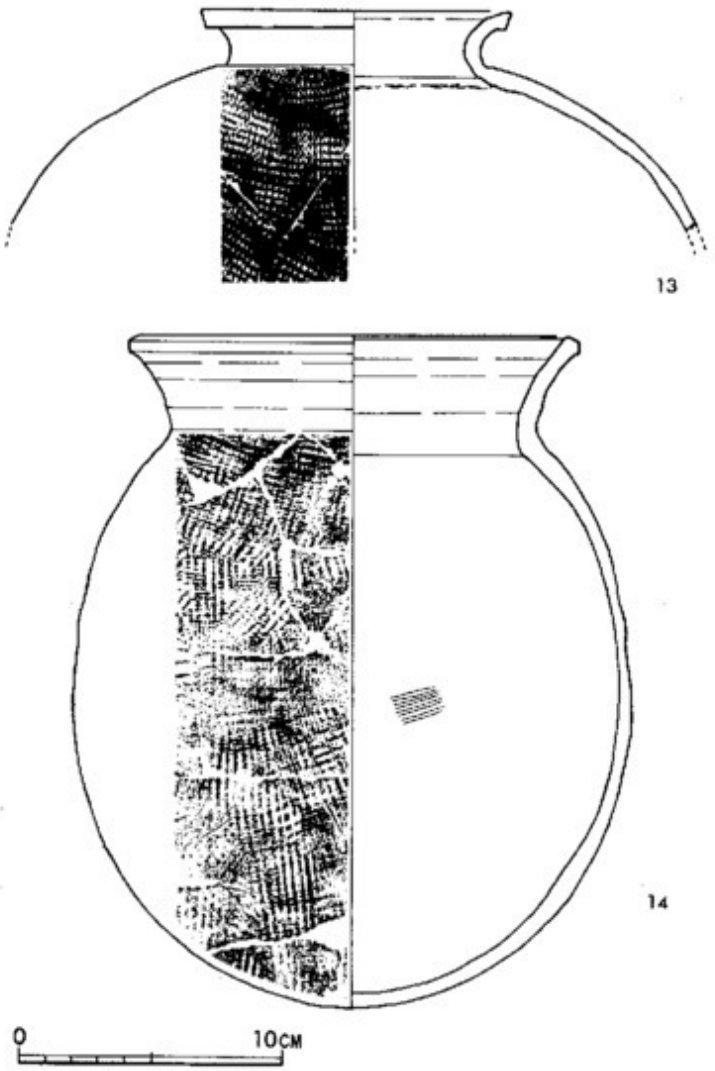


Fig.12　１号墳遺物実測図II

土師器

椀（Fig.11－11）　口縁部は内弯しながら開き、端部は丸い。体部はゆるやかに膨らみ、底部は丸い。体部外面はヨコ方向の静止ヘラ削りの上からヨコ方向のヘラ磨研調整、口縁内面は細いヨコ方向のヘラ磨研調整。

高杯（Fig.11－12）　杯部と脚部の破片で、脚部外面はタテ方向のヘラ削りがめぐる。（原）

耳環（Fig.13）　３個体が玄室床面の敷石間から出土した。１・２は断面楕円形の銅胎に金箔を貼ったものである。保存状態は比較的良く、長径2.4～5cm、短径2.2cm、断面の長径0.8cm、短径0.5cmを計り、一対になる可能性が強い。３も１、２と同様の形態をとり、外面に銀箔を置く。直径2.1～2cmの円形、断面は楕円形で長径0.7cm、短径0.5cmを計る。保存状態は極めて悪く、外側に少しの銀箔をとどめるにすぎない。（松村）

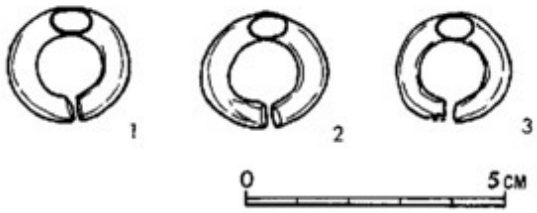


Fig.13　１号墳遺物実測図Ⅲ

Tab.　1　１号墳出土土器計測表

	類	No.	口径	器高	かえり径	つまみ高	胎　土	焼成	色　調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
杯蓋	Ⅰa	1	10.3	3.6	8.0	1.1	砂粒混	良好	青　灰	時　計		4区
	Ⅰb	2	9.9	2.1	8.1		砂粒混	良好	青　灰		○	4区
	Ⅱ	3	9.2				砂粒混	良好	青　灰			4区
高杯		No.	口径	器高	脚端径	脚高	胎　土	焼成	色　調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
		4	9.6	10.0	6.9	6.1	砂粒多し	不良	黄灰色		○	墓　道
甕	Ⅰ	No.	口径	器高	体部最大径		胎土	焼成	色　調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
		5			7.8		良	良好	暗青灰色			墓
壺		No.			体部最大径		胎　土	焼成	色　調	ロクロ回転方向		出土地点
		6			10.0		砂粒含	良好	黒灰色	時　計		墓
平瓶		No.	口径	器高	体部最大径		胎　土	焼成	色　調	ロクロ回転方向		出土地点
		7	9.4	15.2	20.0		砂粒混	良好	青灰色			石室内
甕	Ⅱ	8	12.9	21.7			砂粒多	良好	黒灰色		○	墓道
甕		9	23.6				砂粒多	良好	青灰色			墓道
		10	23.9				砂粒多	良好	黒灰色		○	4区
土師椀		11	12.2	4.7			砂粒多	良好	赤褐色			石室内
土師高杯		12					砂粒多	不良	赤褐色			墓　道
甕		13	16.0				砂粒混	良好	暗セピア			墓　道
		14	23.0	34.6	28.4		砂粒多し	良好	赤褐色			4　区

3．　2号墳

1）　墳　　丘

地山整形（Fig.14）　本墳は北西から南東へ延びる丘陵尾根の頂から南に寄ったところに位置し、南に開口する石室を構築したものである。したがって古墳構築のための地山整形は丘陵斜面を半周する馬蹄形溝の掘削と溝の内側、すなわち墳丘基底面の整地という作業からなる。

馬蹄形溝は南西向きの斜面、標高22.0ｍほどを上端として、斜面に添って削り出している。その範囲はⅠ～Ⅳ区全域にわたり、墓道の南側は墓道と直交するような削り出しが施される。溝東側は一度すぼまり、外縁が直角に大きく開き、その幅が2.54ｍに大きく広がる。全体に傾斜に沿って掘られており底面の高低差が著しい。最も高い部分で21.55ｍ、最も低いⅠ区で19.60ｍを測り、約1.95ｍの差をもつ。溝の断面形も高低部で異なり、高い部分で皿状、低いⅠ区でV字状をなす。溝の内側は平坦なテラス状に整形され、傾斜にそって北から南へ除々に下る。東西方向はほぼ水平である。墳丘基底面は平坦であり、墳丘築造前の地表の痕跡は認められない。

墳丘（Fig. 4 ）　傾斜面に立地するため墳丘の遺存状況は極めて悪く、遺存良好なＡトレンチで0.36ｍ、Ｂトレンチでは0.22ｍを計るにすぎない。等高線も古墳の部分でわずかに膨む程度で、石室主軸に対して約45°の方向を保って平行し、円弧を描かない。

溝の部分で攪乱等により不明瞭な所もあるが、墳丘はほぼ溝内側の整地面を基底にして盛土を行っている。ただＣトレンチでは溝の外側よりも内側が低くなっていて、盛土で溝の肩部を整形している。東西墳丘裾は直線状を呈し、南東裾部と隅丸をとりつつほぼ直角に交る。南西隅は内弯気味に造出されているが、この部分は後出する１号墳造成により削平されている。北側裾部は半円形を示す。

全体を石室基底面まで掘り下げていないので石室裏込部の状況は不明確であるのでＡ～Ｃトレンチで観察し得た事柄を記す。奥壁を据えた後、腰石上の壁体架構と交互に裏込部に地山粘土を充填している。その後全体の盛土をほぼ水平にとり、墳形を築造したものと考えられる。前述したように残存する盛土は少いが、少くともあと数ｍの封土の高さは存在したであろうし斜面の削り出しによって低まりを見せていることから、実際の盛土の高さより見かけの高さは著しく大きく感じたものであろう。

2）　横穴式石室

本墳の埋葬施設は主軸をＮ－15°－Ｅにとり、南西の浅い谷に向って開口する単室の両袖型横穴式石室である。石室はすべて天井石を欠き、また右側壁は試掘時に大きく損なわれていた。

石室は掘り方の内側に構築され、羨道部の先に谷へ下る墓道が連結する。石室の平面は長方

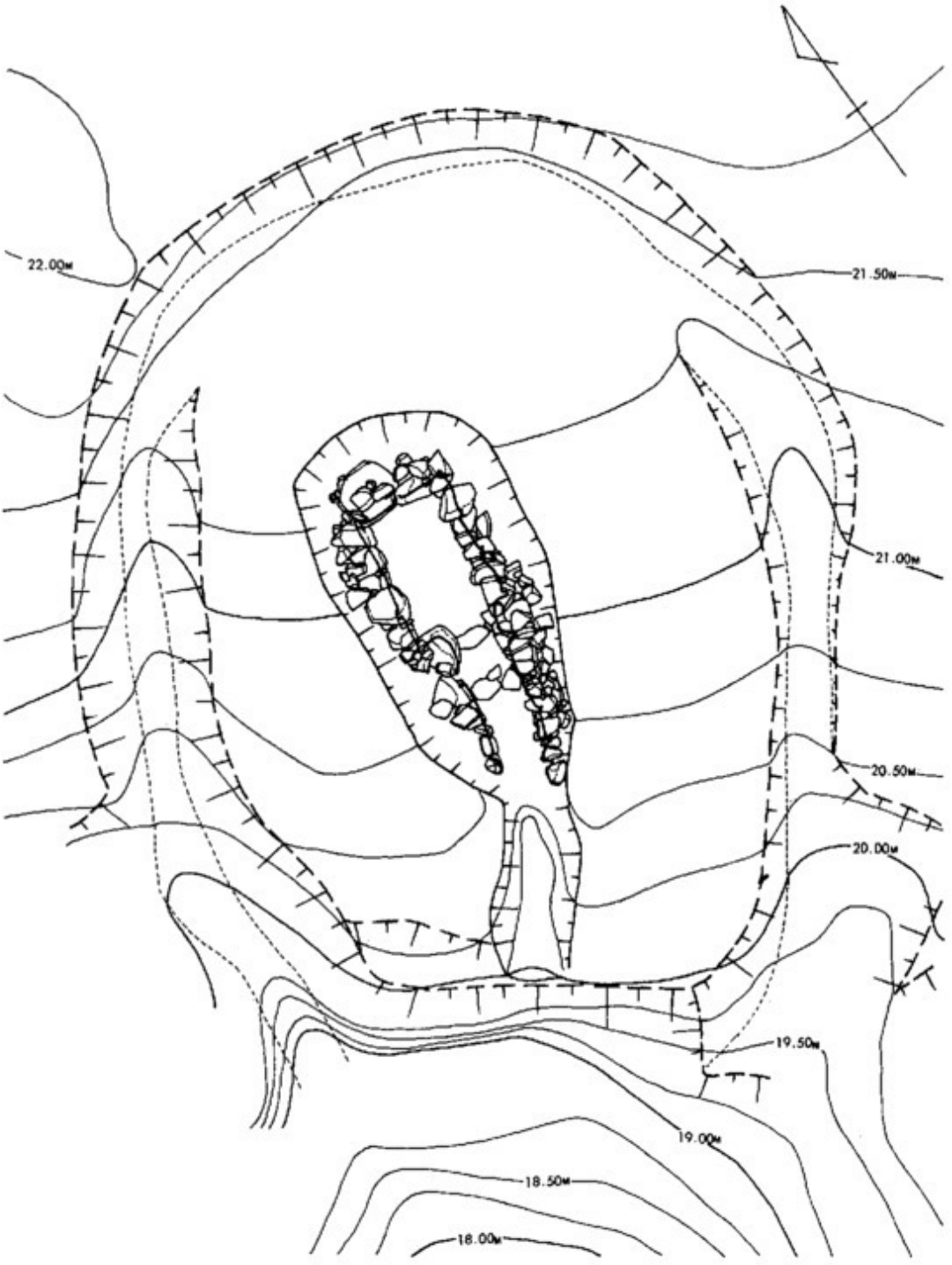
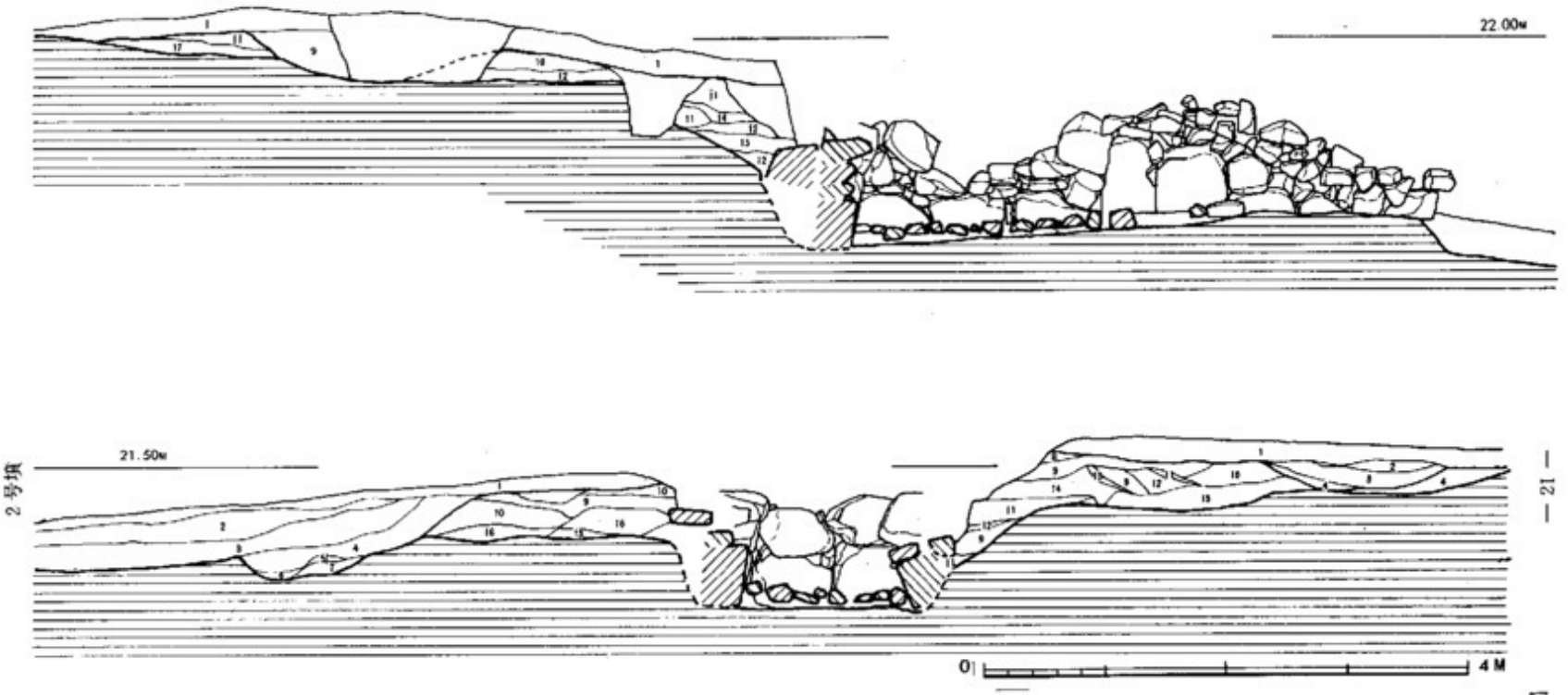


Fig.14　２号墳掘り方及び地山整形



1. 表土
2. 褐色粘質土
3. 灰褐色粘質土
4. 灰色粘質土
5. 黄褐色粘質土
6. 灰褐色粘質土
7. 黒褐色粘質土
8. 灰色粘質土
9. 灰褐色シルト
10. 灰褐色粘質土
11. 灰紫色粘質土
12. 暗褐色粘質土
13. 灰色シルト
14. 褐色粘質土
15. 暗褐色粘質土(礫を含む)
16. 灰褐色粘質土(礫を含む)
17. 黄褐色～紫色粘質土

Fig.15 2号墳墳丘断面図

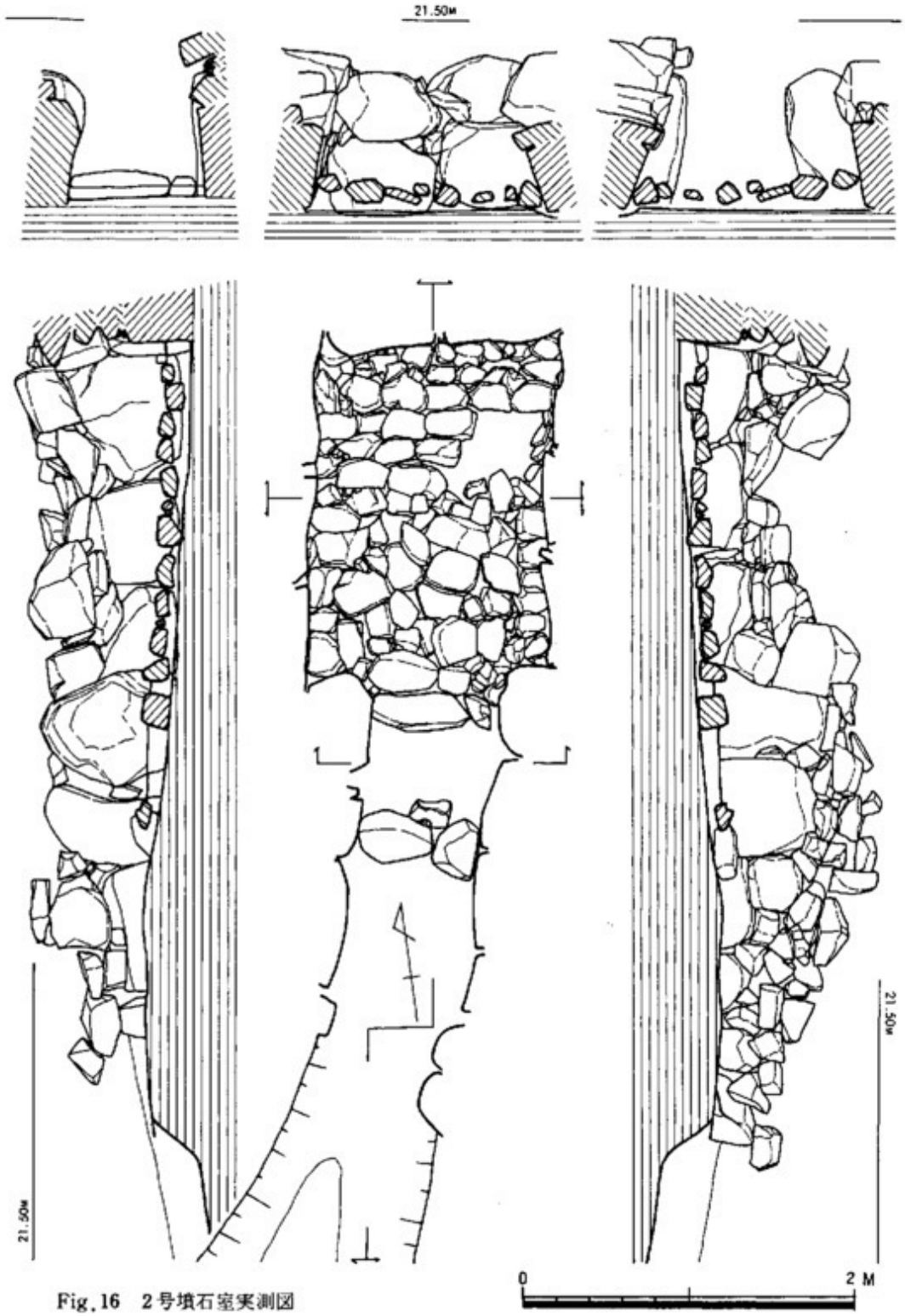


Fig.16　２号墳石室実測図

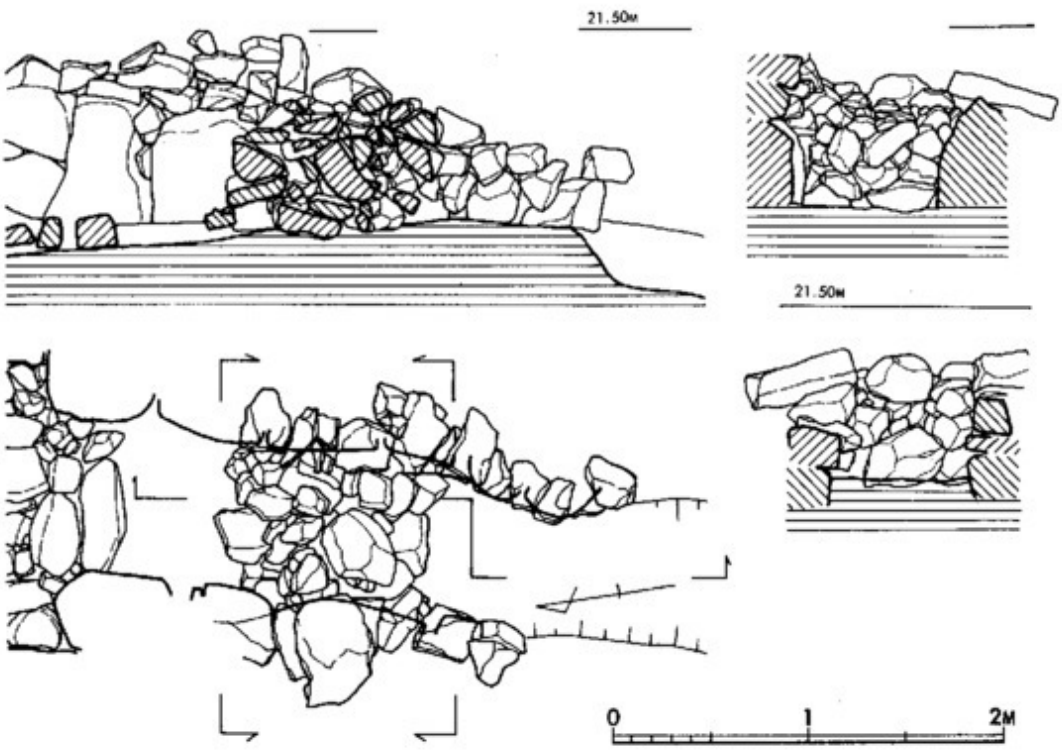


Fig.17　2号墳閉塞部実測図

形の玄室に細長い羨道をつけた通有のもので、左壁は全長4.14m、右壁4.78mを測る。石室を構成している石材は主に花崗岩、礫岩を使用し、一部硅化木も混る。

石室の掘り方　調査期間の関係上、掘り方の平面形を確認し、他はA～C各トレンチでの観察に終った。

石室の掘り方は馬蹄形溝に区画された整地面のほぼ中央部にある。東西幅3.04m、南北長5.79mの隅丸長方形をなす。左羨道部側はゆるやかに、右羨道部側は強く屈曲する。墓坑は二段に掘り込まれている。石室の用石より約2mの位置から約30°の傾斜で一旦掘り下げられ、さらに石際からほぼ垂直に近い角度で掘り込まれ、深さは玄室部で1.32mを測る。整地面の傾斜に沿ってしだいに浅くなり、墓道との境界ではほぼ同一高となっている。石室腰石はほぼ掘り方内いっぱいに配置されている。腰石および裾石の配置にあたっては、掘り方底部を更に一段掘り下げたり、小礫を敷き安定を図っている箇所も観察できる。

玄室　奥幅1.49m、前幅1.47m、右壁長2.20m、左壁長2.14mを測る。左右壁線は多少凹凸があるがほぼ直線である。

壁体の構成法は各壁面に共通した手法を用いている。奥壁2石、左・右壁各3石の大ぶりの割石もしくは内面のみを整えた転石を立て腰石としている。側壁の腰石から上方は小ぶりの転

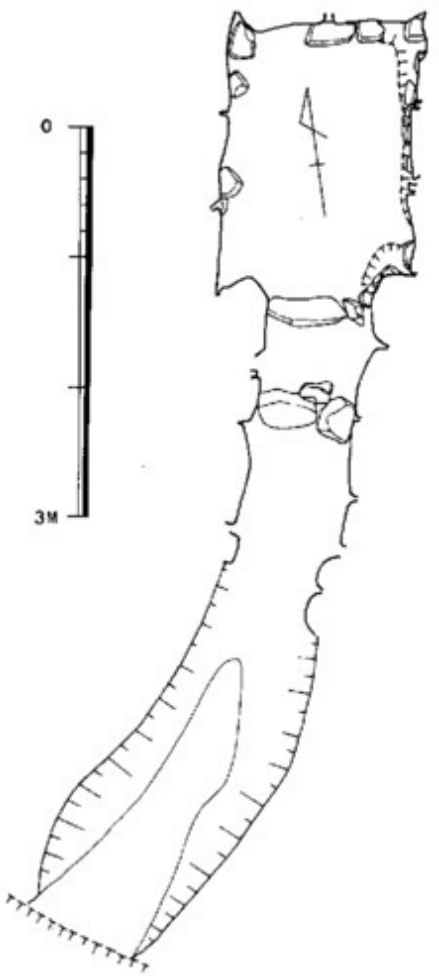


Fig.18　２号墳石室基底面実測図

石を置き、水平を保つようにして大きめの転石を積んでいる。奥壁部は縦横に目路が通るよう横積みしている。各壁は腰石部から内傾し、同じ傾斜を保ち上位に至る。壁高は最高部で床面から0.82ｍを測るが、元来この上に数石を積み２ｍ前後で天井石となったものであろう。

玄門部は素型の両袖を配するだけで特別の造作はない。袖石には未加工の転石を垂直に立て、袖石幅は左が0.41ｍ、右が0.30ｍを測る。

床面には径20～30cmの割石、転石で敷石が施してある。一部盗掘により欠損している箇所もあるが、本来は全面に敷き詰められていたものであろう。

羨　道　天井部、壁体上半部を失うが比較的良好な状態で残っている。羨道長は左壁で2.09ｍ、右壁で2.83ｍを測り、左右壁長にわずかな差異を認める。奥幅は第２梱石の部分で0.76ｍ、中央部で0.73ｍ、墓道側で0.67ｍの狭長な羨道である。羨道は石室から直線に延びてなく、石室の主軸に対し西へ約10°寄っている。

壁体の構成は玄室と同様で大ぶりの転石を立て腰石とし、その上に、転石を横積みにしている。ただ袖石と接する部分は石を縦積みにしている。

床面には２ヶ所に梱石が配される。第１梱石は丸味をもつ３個の転石を組み合わせて閉塞石の根石としている。第２梱石は細長い割石を中央に据え、右壁寄りに小ぶりの石を置く。奥壁中央部からその前面までの距離は各々2.11ｍ、2.76ｍを測る。羨道部床面には敷土は認められず、直接地山となる。先端は0.30ｍの大きな段差をもって墓道となる。

墓　道　墓道は羨道部に連接して南西方へ弧状に下る。最大幅1.20ｍ、長さ2.53ｍを測る。断面形は浅い皿状を呈する。南側の墓道の先端は緩な傾斜面を鋭い角度で切っているが、これは２号墳築造によるものと考えるより、むしろ後続する１号墳築造によるものであろう。

閉塞施設（Fig.17）　羨道部中央からやや玄室寄りに第１梱石を根石とした閉塞施設が存在する。転石を積みあげて閉塞するもので現存高0.77ｍであるが、元来は天井石との間が完全に

密封されていたものであろう。閉塞の位置は墓道側で奥壁中央から3.80m、羨道内側では2.71mでその間約1.1mである。石積みは全体的に雑然とした状態である。下部に大きめの石を、上部にいくにしたがい小さな石が使用されているのは通常の通りである。
（松村）

(3) 遺　物

出土状況（Fig.19）　遺物は玄室、墓道、Ⅳ区墳丘、墳丘裾から出土している。玄室は後半部が一部盗掘を受け、遺物は腰石にそって数点の鉄鏃片が残るのみである。前半部は盗掘をまぬがれていて原位置を保つ遺物が出土している。玄室前半部の敷石床面中央部に須恵器の杯（13、15～20）、杯蓋（4～9）、土師器高杯（27）および鉄鏃1点が一括して置かれていたが、その状態は、身、蓋共にばらばらで、蓋の破片1点が袖石わきから出土していることなどからみると、追葬時における副葬品の集積ではないかとみられる。墓道には須恵器の杯類、高杯、土師器高杯（3、10、14、24、28）が出土したが、いずれも墓道床面より浮いていた。Ⅳ区では須恵器の杯類、壺、甕、土師器高杯（20～23、26、29、30）があるが、いずれも表土層や墳丘裾からの出土である。
（山崎）

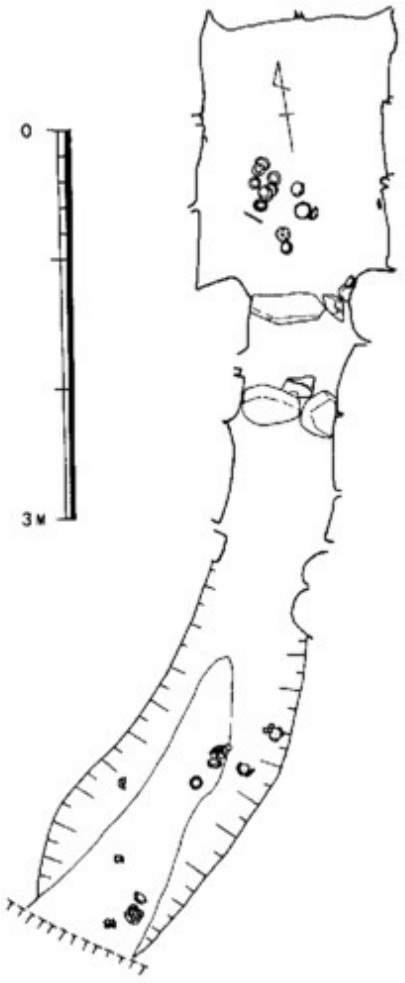


Fig.19　2号墳遺物出土状況図

須恵器

杯蓋（Fig.20－1～9）　9個体出土し、7個体が完形品で、6個体は玄室内の出土である。内面のかえりがないものをⅠ類として、口径の大小からa・b類に細分する。内面のかえりがあるものをⅡ類として、つまみの有無と形態差からa～c類に細分する。

Ⅰa類（Fig.20－1・2）　1は天井部が平坦で肥厚気味、体部との境は明瞭。体部はゆるく内弯して口縁部にのび、口端部は丸い。天井部にはヘラ記号をもつ。11とセットになる。2は天井部が平坦で体部との境は明瞭。体部はやや直線的に開き、口端部は丸い。

Ⅰb類（Fig.20－3）　天井部と体部との境は不明瞭で、口縁部は内弯して端部は丸い。天井部はヘラおこし後未調整。

Ⅱa類（Fig.20－4・5）　天井部は平坦で、体部との境は明瞭。器高は低く、内面のかえ

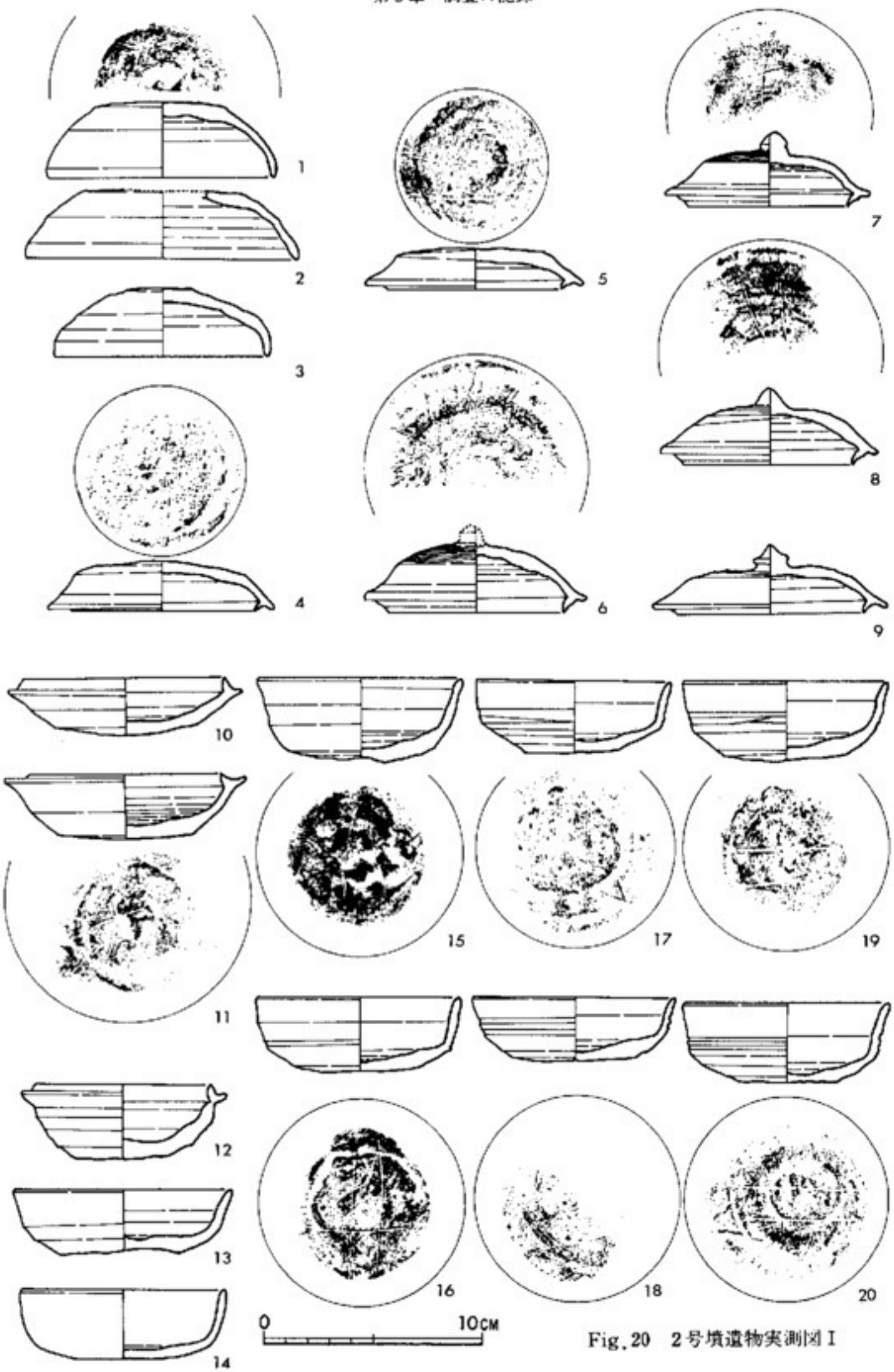


Fig.20　2号墳遺物実測図Ⅰ

りは口端部より少し出る。天井部にはヘラ記号をもつ。4は20と、5は19とセットになる。

IIb類（Fig.20－ 6～8） 疑似宝珠形のつまみを有し、 天井部は丸みをもっていて、 体部との境は不明瞭である。内面のかえりは口端部より少し出る。6・7は天井部カキ目調整、8は天井部左回りのヘラ削り。3点とも天井部にヘラ記号をもち、6は15と、7は17と、8は16とセットになる。

IIc類（Fig.20－9） 宝珠形つまみを有し、 天井部はやや平坦となる。 内面のかえりは口端部より少し出る。天井部は左回りのヘラ削り、天井部にヘラ記号。

杯身（Fig.20－10～20） 11個体出土し、全て完形品である。立ち上がりをもつものをI類とし、さらに技法と形態差によりa～c類に細分する。 立ち上がりをもたないものをII類とし、形態差と技法からa～c類に細分する。7個体は玄室内出土。

Ia類（Fig.20－10） 蓋受けの立ち上がりは内傾して端部は尖り気味。 底部と体部の境はやや不明瞭で、体部は浅く、 底部はヘラおこし後末調整。

Ib類（Fig.20－11） 蓋受けの立ち上がりは、内傾して、口端部より少し出る。 口端部は尖る。底部は厚く、平坦である。底部にヘラ記号。

Ic類（Fig.20－12） 器壁は厚く、蓋受けの立ち上がりは、 やや内傾して、 上方へ引き出され、端部は丸い。体部は深みをもち、体部と底部の境は不明瞭。体部はヘラ削り、底部はヘラおこし後末調整。

IIa類（Fig.20－13） 体部はやや直線的に外傾して立ち上がり、 口端部は丸い。 底部は体部との境が明瞭で、上げ底である。

IIb類（Fig.20－14） 体部は内弯気味に外傾して立ち上がり、 口端部は丸い。 底部と体部との境は丸みをもち、底部はやや平坦になる。

IIc類（Fig.20－15～18） 体部は外傾して立ち上がり、口端部は丸い。 底部はやや平坦で、体部との境は明瞭である。体部には沈線を1条（16）、2条（17～18）もつものと、もたないもの（15）がある 底部ヘラおこし後末調整。16・17は体部と底部の境に右回りのヘラ削り。全て底部にヘラ記号をもつ。

IId類（Fig.20－19・20） 形態・技法ともIIc類に類似するが、 蓋とのセット関係から細分する。19は体部下半に右回りのヘラ削り。20は体部に2条の沈線がめぐり、体部と底部の境は左回りのヘラ削り。底部はヘラおこし後末調整。

短頸壺（Fig.21－21・22） 21は口縁部で外傾して立ち上がる。口縁部の口端部は段をもつ。22は球形の体部に直線的に外傾して立ち上がる口縁部が続き、口端部は稜をもち、口端部下には突帯がめぐる。体部外面はカキ目調整。

壺蓋（Fig.21－23） 中央部が凹むつまみを有し、受部内面のかえりは、下方垂直方向に高く引き出される。天井部ヘラ削り。

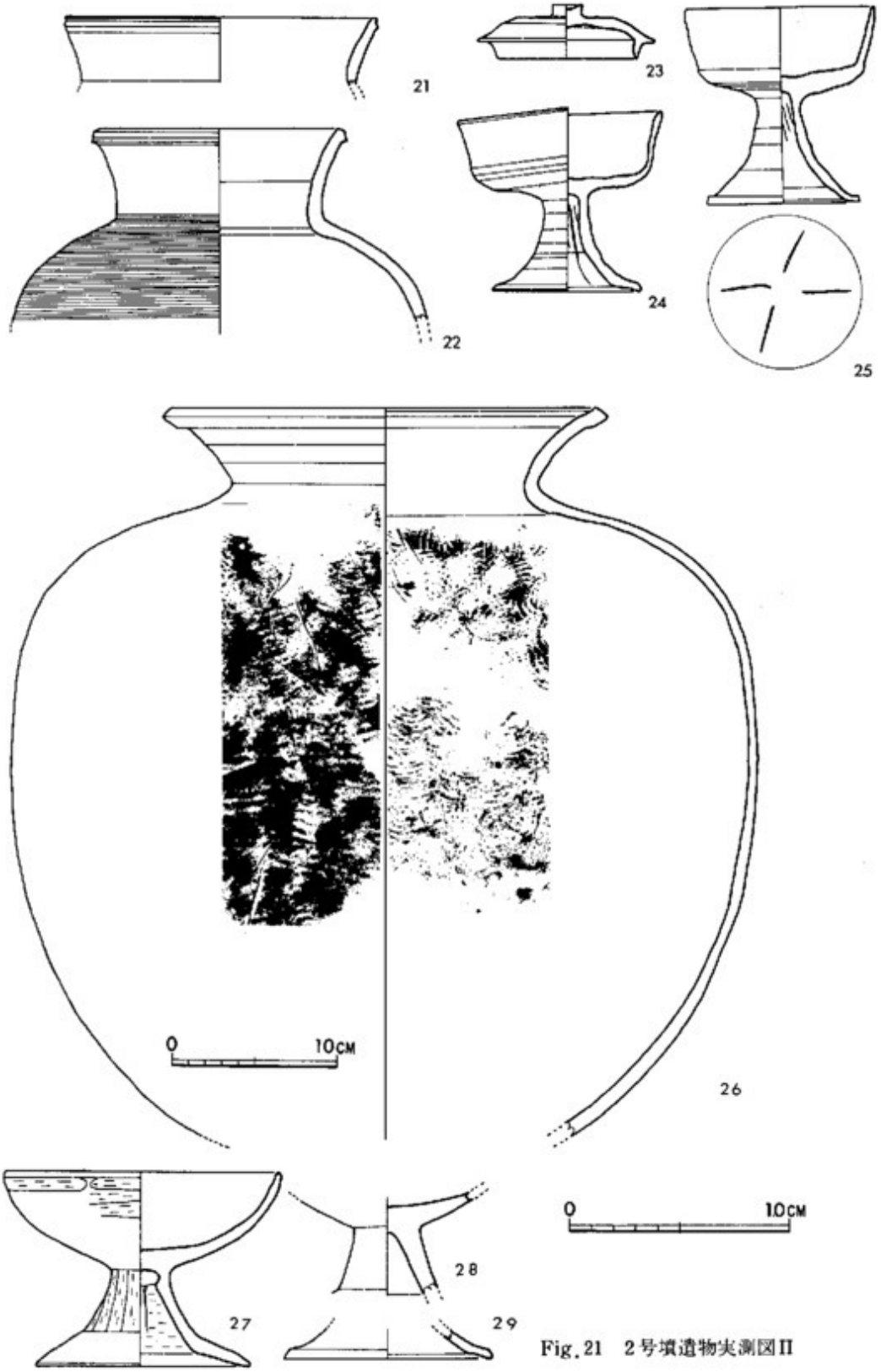


Fig. 21　２号墳遺物実測図II

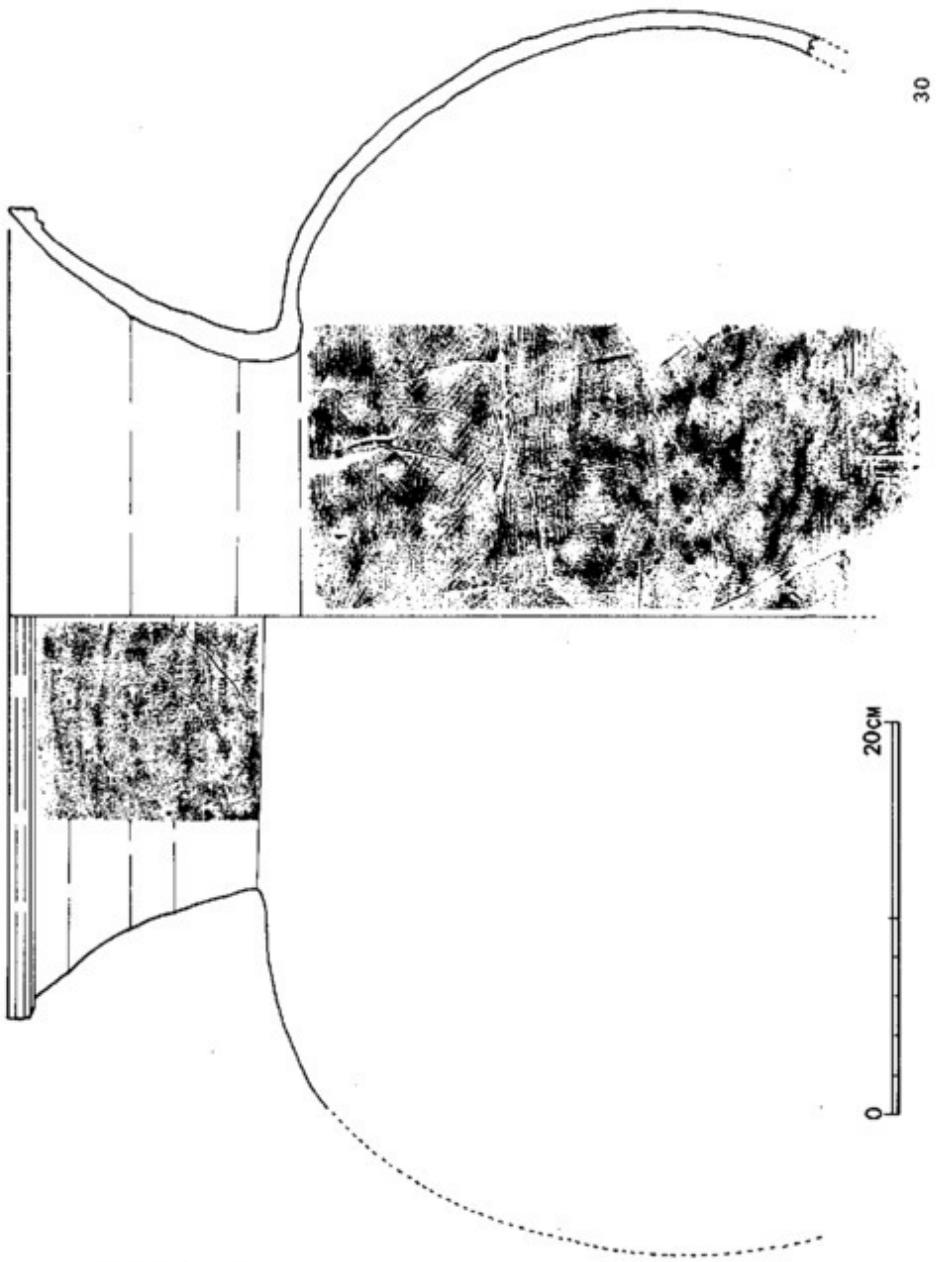


Fig.22　2号墳遺物実測図Ⅲ

無蓋高杯（Fig.21－24・25）　2個体出土し、完形品である。25は杯部の体部から口縁部へ外傾して立ち上がり、口端部は丸い。脚部は外反しながら、下方へ開き、端部は下方へ少し引き出される。内面にはしぼりの痕跡が見られる。25は杯体部が直線的に外傾して立ち上がり、

口端部は丸い。杯体部と杯底部との境は段をもつ。脚は外反しながら下方へ開き、脚端部は上方に引き出される。内面にはしぼりの痕跡が見られる。脚部内面にヘラ記号。

甕（Fig.21－26、Fig.22－30）　26は短かい口頸部が外反して立ち上がり、口端部はコの字形で、端部下には弱い段がつく。体部最大径は中央より上である。体部外面は平行タタキの上からなで調整。内面は上半が同心円文。下半が平行タタキである。30は頸部が外傾して直線的に立ち上がる。口端部は上方に引き出されて丸い。端部下は段がつく。頸部外面は縦方向の刷毛目調整、体部内面は平行タタキ。

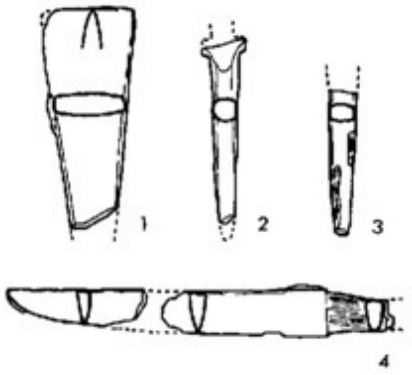


Fig.23　2号墳遺物実測図Ⅳ（1/2）

土　師　器

高杯（Fig.21－27～29）　3個体出土し、1個体が完形品である。27は杯部の底部から口縁部へかけて内湾して大きく膨み、口縁端部は丸みをもち、外側に稜が入る。脚部は直線的に外へ開く、下半で屈曲してさらに広がる。脚端部は丸い。杯体部外面は一部に横方向のヘラ削りが見られ、そのあとに横方向のヘラ磨研調整をしている。脚部は上半で縦方向のヘラ削り、内面は横方向の右から左へのヘラ削り。内面にしぼりの痕跡を認める。28は杯体部と脚部の破片で、器壁は厚い。29は脚端部が丸みをもち、やや下方に引き出される。（原）

鉄　　器

鉄鏃（Fig.23－1～3）　1は斧箭式に属するもので、茎部を欠損する。長方形の身は断面平造りで、頭部は両刃である。2、3は茎部の破片。2は棘状突起をもち、断面は楕円形を示す。3は断面が長方形で、表面に木質が遺存している。

刀子（Fig.23－4）　両関の刀子で身の中ほどで二折しているが、同一個体と考えられる。全体に小ぶりで断面が二等辺三角形をなす。（松村）

Tab.2　2号墳出土土器計測表

	類	No.	口径	器高	かえり径	つまみ高	胎　土	焼成	色　調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
杯蓋	Ⅰa	1	10.3	3.4			砂粒混	不良	淡セピア		○	4　区
		2	12.4	3.1			砂粒多	不良	黄褐　色			4　区
	Ⅰb	3	9.7	3.2			砂粒多	不良	青灰色			墓　道
	Ⅱa	4	10.4	2.3	8.4 8.4		砂粒混	不良	灰　色		○	石　室
		5	10.1	1.9	8.0		砂粒混	良好	青灰色		○	石　室

	類	No.	口径	器高	かえり径	つまみ高	胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
杯蓋	IIb	6	10.4	4.1	8.0	(0.9)	砂粒混	良	青灰色		○	石室
		7	9.5	3.5	7.3	0.9	砂粒混	良	青灰色		○	石室
		8	10.1	3.6	7.6	0,9	砂粒混	良	青灰色	時計	○	石室
	IIc	9	10.8	3.2	8.5	1.0	砂粒混	良	青灰色	時計		石室
杯身		No.	口径	器高	受部径		胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
	Ia	10	9.3	2.7	10.8		砂粒混	良	青灰色			墓道
	Ib	11	8.6	3.0	11.2		砂粒混	不良	淡セピア		○	4区
	Ic	12	8.0	3.5	9.5		砂粒多	良	暗灰色	?		4区
	IIa	13	10.1	3.1			砂粒混	良	青灰色	逆時計		石室
	IIb	14	9.3	3.3			砂粒多	不良	黄褐色			墓道
	IIc	15	9.5	3.9			砂粒混	不良	青灰色		○	石室
		16	9.4	3.5			砂粒混	不良	青灰色	逆時計	○	石室
		17	9.0	3.4			砂粒混	良	青灰色	逆時計	○	石室
		18	9.4	3.0			砂粒混	良	青灰色	逆時計	○	石室
	IId	19	9.5	3.7			砂粒混	良	青灰色	逆時計	○	石室
		20	9.6	3.7			砂粒混	良	灰色	時計	○	石室
壺		21	14.3				砂粒多	良	黒灰色			1区
		22	11.6				砂粒多	良	セピア			4区
壺蓋		No.	口径	器高	かえり径	つまみ高	胎土	良	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
		23	8.2	2.5	6.4	0.6	砂粒混	良	黒灰色	時計		4区
高杯		No.	口径	器高	脚端径	脚高	胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
		24	9.4	8.4	6.9	4.1	砂粒混	良	青灰色			墓道
		25	8.5	8.9	7.0	4.7	砂粒混	良	セピア		○	石室
甕		No.	口径	器高	体部最大径		胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
		26	26.8		45.0		砂粒多	良	黒灰色			1区
土師器高杯		No.	口径	器高	脚端径	脚高	胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
		27	12.5	8.9	9.8	4.4	砂粒多	良	赤褐色			石室
		28					砂粒多	不良	赤褐色			墓道
		29			9.5		砂粒多	不良	赤褐色			4区
甕		No.	口径	器高	体部最大径		胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
		30	41		63.2		砂粒混	良	青灰色			4区

4．3号墳

1）墳　　丘

地山整形（Fig. 24）古墳は丘陵斜面等高線に約90度の角度で交わる方向で石室を構築している。古墳構築のための地山整形は丘陵斜面を半周する馬蹄形溝の掘削と墳丘基底面の整地という二つの作業からなっている。

馬蹄形溝は傾斜面の標高21.20mほどを上場として傾斜面にそって削り出しており、II区では、2号墳の馬蹄形溝を切り、III区を巡りIV区で無くなっている。馬蹄形溝の幅は、Bトレンチで1.5m、Cトレンチで0.9mで、深さは、Bトレンチで0.5m、Cトレンチで0.25mである。

墳丘基底面は、全体にテラス状に削り出す手法がとられているが、III区からII・I区へ若干傾斜している。

墳　丘（Fig. 4）墳丘はテラス状に削り出された整地面を基底面として盛土を行っている。墳丘は流土が激しく残りは悪いが、墳丘の形成過程は大きく2段階に別けることができる。第1段階は石室構築の壁石の裏込め的なもので、第2段階は墳形を整えながら天井部の被覆を行ったと思われる。第1段階は墓坑内の腰石の安定後、壁石の積み上げに平行して、粘質土とシルトを交互に1段ずつ叩きしめながら盛り上げている。この段階の盛土は石室掘り方内に集中している。第2段階の盛土は、第1段階に比べてあまり硬くしめられていないがII・III区にかけてはていねいに行われている。I・IV区については赤褐色粘土層～シルト層が盛られているが、IV区はほとんど流出している。

墳丘遺存高は稜線側(北側)で0.25m、南側では見かけの高さ約1.5mとなっている。墳丘平面については、南北径10m・東西径10mで、西側が少し尖ったおむすび形をしている。

墓拡と墓道　墓坑・墓道は墳丘を除去し観察した。墓拡は墳丘基底面のほぼ中央部に垂直に掘り込まれたもので、平面形は隅丸方形をなしている。墓坑の長さは3.5m、玄室部幅3.3mで、羨道部より狭くなって西へゆるく曲りながら墓道となっている。墓道は約6m、丘陵の傾斜に直交しながら続き消滅している。墓坑の深さは玄室部西で1.1m・北で1.5m・東で1.2mである。墓道は幅1.5mの皿状をなす断面で、羨道部附近が0.7mで南にいくに従って浅くなっていき消滅している。

2）横穴式石室（Fig. 26）

本墳の埋葬施設は主軸をN－51°－Eにとりほぼ南に開口する単室の両袖型横穴式石室である。石室は天井部を失っており、流土・壁石の崩落によって完全に埋まっていた。

石室はほぼ方形プランを有する玄室に羨道を連接している。石室を構築する石材は礫岩が大

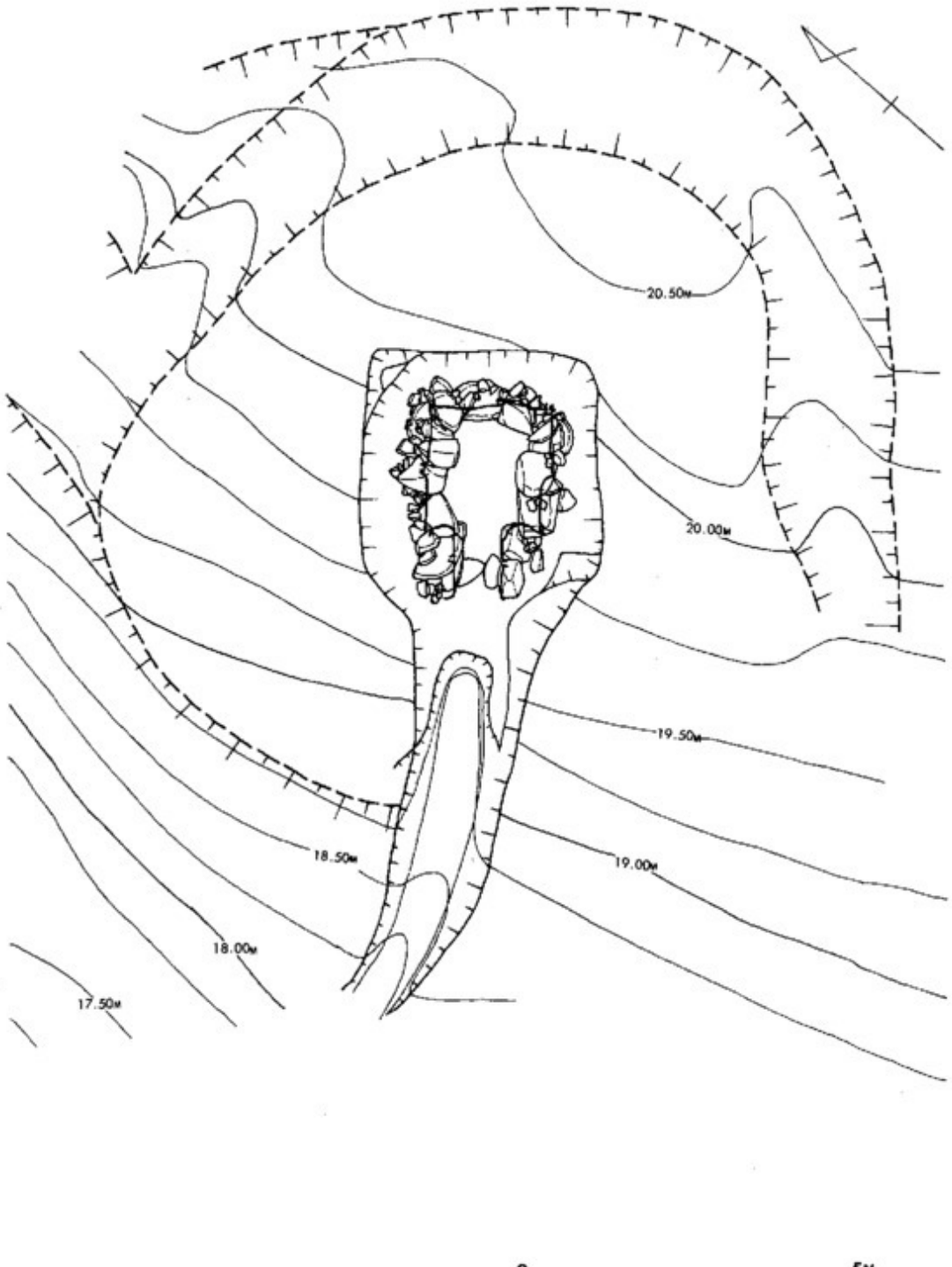


Fig.24 3号墳掘り方及び地山整形

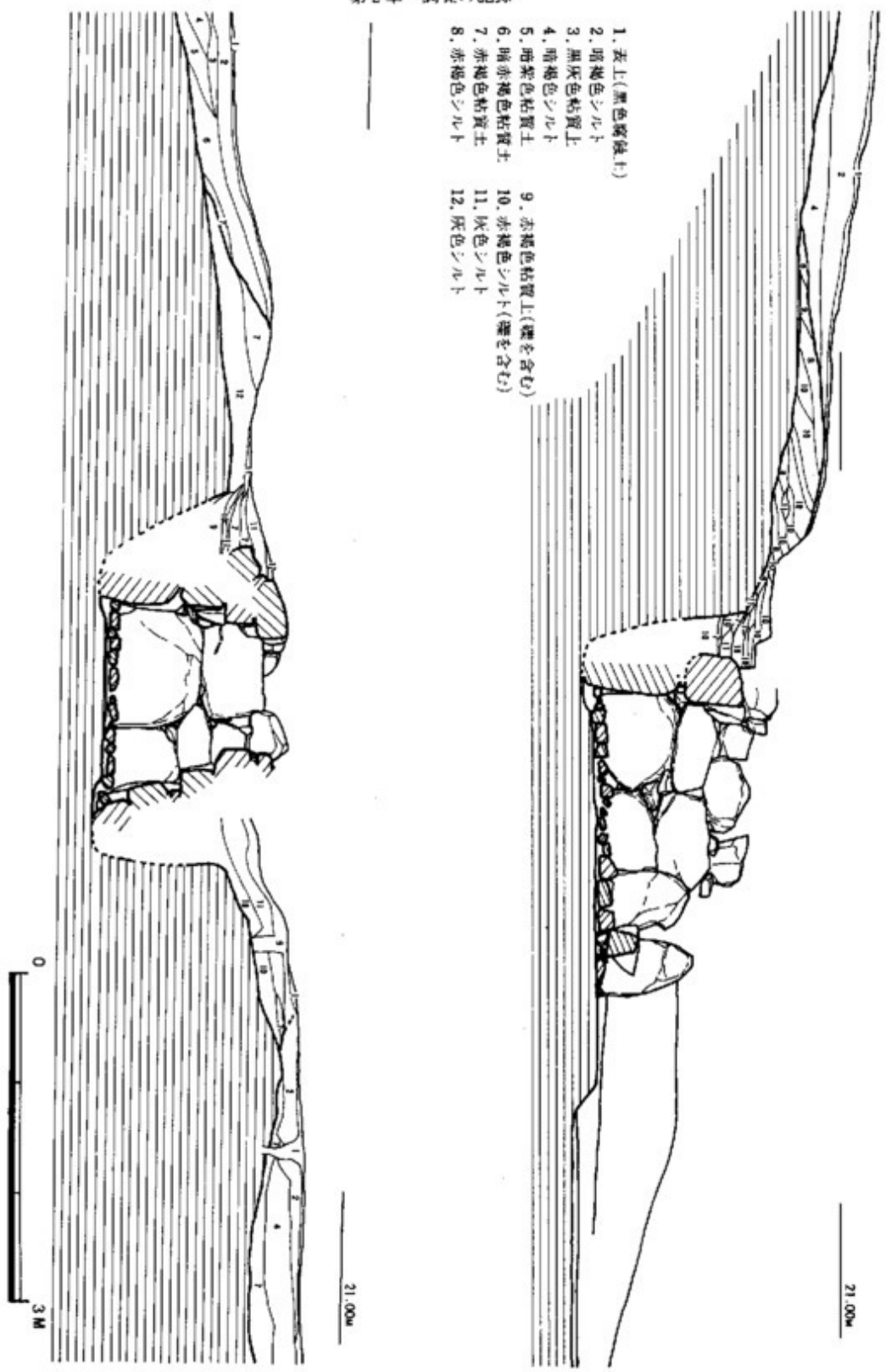


Fig.25　3号墳墳丘断面図

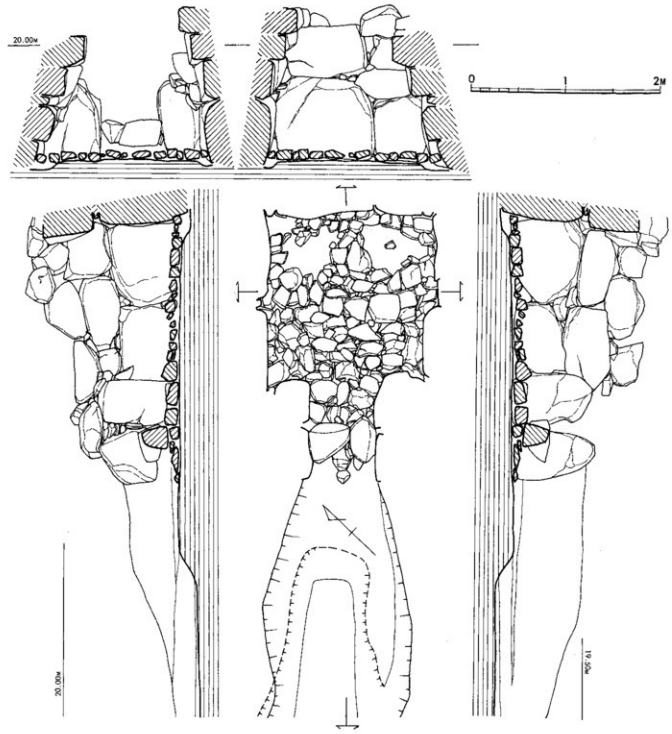


Fig.26 3号墳石室実測図

部分をしめているが、右袖石等に砂岩が用いられている。

玄　室　奥幅1.75m、前幅1.65m、右壁長1.70m、左壁長1.80mのほぼ方形プランで、遺存高は奥壁が1.45m、右壁が1.40m、左壁が1.70mである。壁体の構築法は各壁体とも共通しており0.5×0.5m～1×1mの比較的大きい転石を各2個づつ配して腰石としている。腰石の上は、腰石より一まわり小さい石を横積みにしている。奥壁・左右壁の腰石ともわずかに内傾し、その上部の石積みも腰石の傾斜にそっている。奥壁と側壁の隅角は、腰石部で奥壁を挟み込むように配置されているが、腰石の上からは互いに重なる力石が使用されている。

玄門部は両袖で、右袖が0.4m、左袖が0.35mを測り、ほぼ同じ程度で、右袖石には礫岩を、左袖石には砂岩を用いて縦位に立てている。

床面は0.3×0.3m以下の扁平な転石をほぼ全面に敷きつめているが、奥壁部が少し攪乱を受けていた。遺物は奥壁に直刀等の鉄器が、右袖石の下に壺が1点出土している。

羨　道　羨道部は長さ1mで墓道に向って少し開いている。右壁は0.5m×0.8mの砂岩・礫岩で並べて縦位に立てており、左壁は礫岩・砂岩と並べて立てて腰石としている。

床面には、2枚の縦位に立っている腰石の間に2個の転石を用いて横に並べた梱石がある。奥壁中央部から梱石までの距離は2.25mで、梱石から玄室にかけては敷石があり、梱石の下まで敷石があるがすぐ地山となって墓道となっている。（山口）

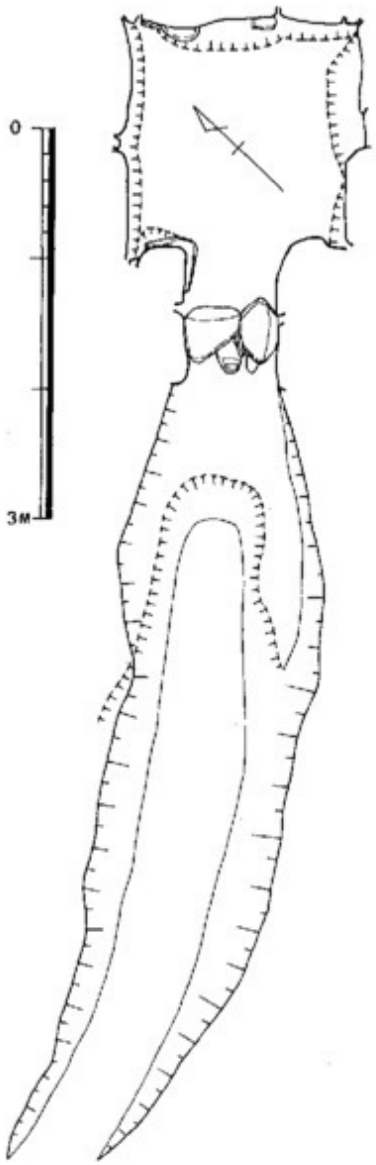


Fig.27　3号墳基底面実測図

3）遺　物

出土状況　(Fig.28) 遺物は玄室、墓道、墳丘から出土している。玄室は盗掘による攪乱によって原位置を保つものは少いが、腰石にそった部分では原位置を保っていた。まず、玄室奥壁に平行して、直刀が切先を左壁（北）において出土したが、他の部分は攪乱によって移動している。鉄鏃も腰石にそって一点認められた。また、羨道部の閉塞部の角に直口壺（24）と刀子

が出土している。墓道には多量の須恵器、土師器が出土している。器種は杯、杯蓋、甕、高杯があり、時期的にはかなりの幅があるが、すべてが床面より浮いた状態で層位的な出土ではない。墳丘から出土した遺物は少いが元来は墳丘上にあったものが、盛土の流失等により散乱したと考えられる。（山崎）

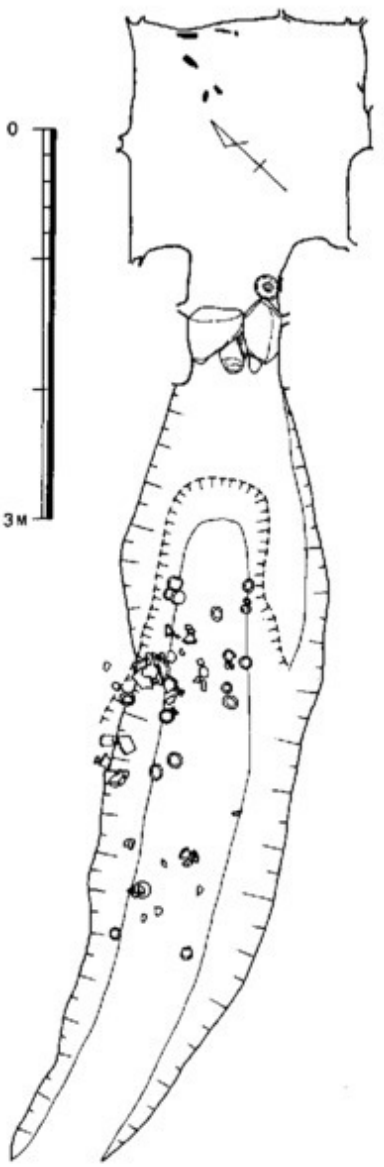


Fig.28　3号墳遺物出土状況図

須　恵　器

杯蓋（Fig.29－1～11）　11個体出土し、10点が完形品である。内面のかえりのないもの（Ⅰ類）とあるもの(II類)との2類に大別し、さらにⅠ類は口径が12.0cm前後のものをa類、11.0cm前後のものをb類。II類も疑宝珠形つまみをもつものをa類、つまみがなく、かえりが浅いものをb類、中凹みのつまみをもつものをc類、b類よりも身受けの立上りが高いものをd類と細分した。

Ⅰa類（Fig. 29－1～4）　天井部と体部の境は不明瞭で、ゆるやかに内湾しながら下方へのび、口端部は丸い。器壁は薄く3～5㎜の厚さである。天井部の½強が右回りのヘラ削り、口縁部はヨコナデ調整、内面にヘラ記号をもつ。

Ⅰb類（Fig.29－5）器壁は厚く、天井部と体部の境は不明瞭で、体部はゆるく内湾しながら下方にのび、口端部は丸い。天井部から体部にかけて静止ヘラ削り、内面にヘラ記号をもつ。

IIa類（Fig.29－6）　疑似宝珠形つまみを有し、天井部はやや平坦、体部は深くわずかに開き、内面のかえりは少し厚手で短く下方に引き出され、端部は尖り気味で口端部より内側である。天井部に左回りのヘラ削り、内面にヘラ記号を有する。

IIb類（Fig.29－7）　天井部と体部の境は不明瞭で、丸みをもって下方にふくらみ、内面のかえりは内傾して下方に引き出され、口端部より少し出る。

IIc類（Fig.29－8・9）　2個体出土し、なま焼けで、中央部の凹むつまみを有し、天井部から口縁部へは直線的なもの（9）、ふくらみ気味なもの（8）がある。口端部は下方に引き出され、端部外側は面を形成する。かえりは鋭く下方に引き出され、口端部下方に出る。天井部

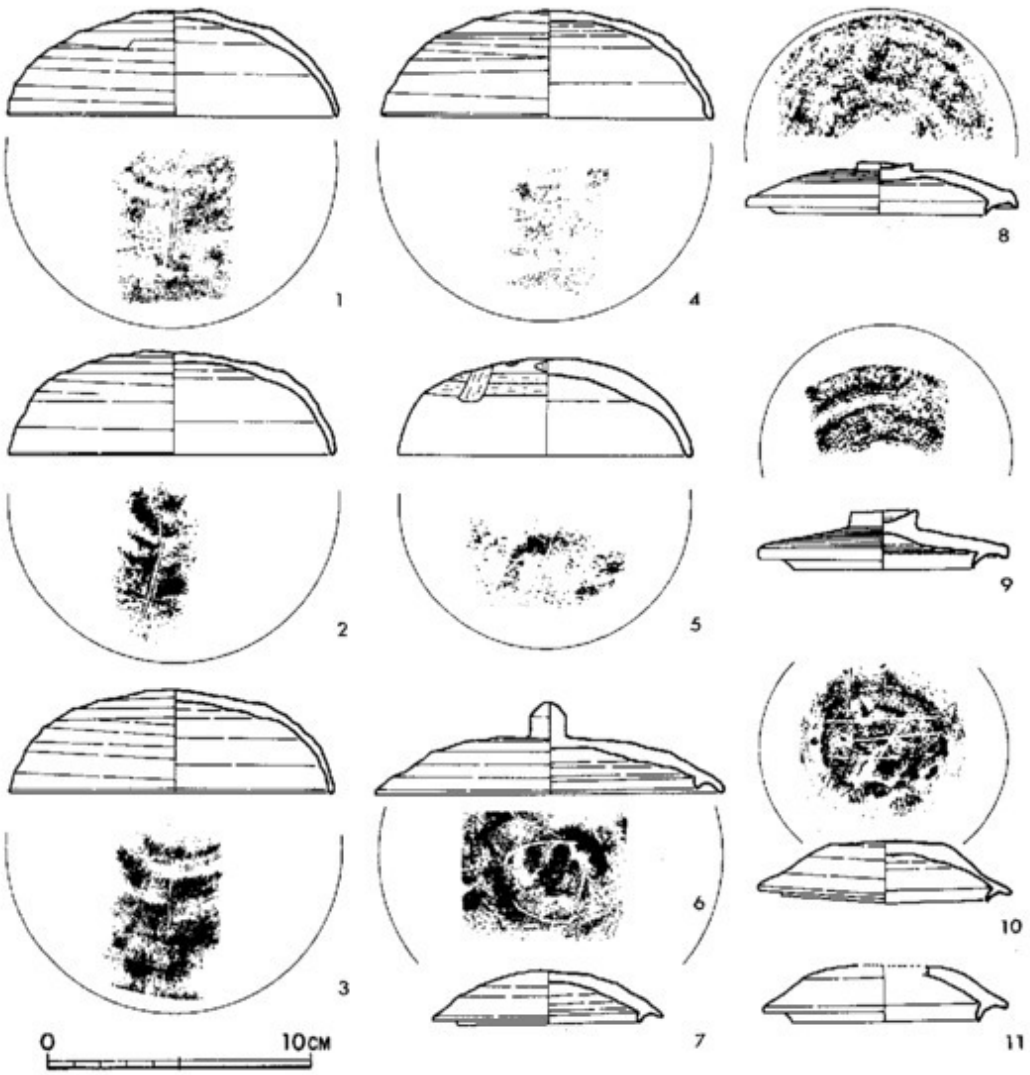


Fig.29 3号墳遺物実測図I

から体部は横方向のカキ目調整、9の内面にもカキ目調整が見られる。8・9ともにヘラ記号をもつ。

II d類（Fig.29−10） 天井部は体部との境が明瞭でなくやや平坦になる。 かえりは口端部より少し下に引き出される。天井部にヘラ記号をもつ。

II e類（Fig.29−11） なま焼けで天井部を欠失するが、 内面のかえりは外反気味に下方へ引き出されており、端部は尖り気味、天井部は少し平坦である。

杯身（Fig.29−12〜19） 8個体出土し、7個体が完形品である。立ち上がりをもつもの(I類)と、もたないもの(II類)に大別し、さらにI類は口端部が丸くおさめるものをa類、尖るも

のをｂ類、Ⅱ類は器高が低いものからａ～ｃ類に細別をした。

Ⅰａ類（Fig.30－12～15）　底部と体部の境は不明瞭で、　体部から口縁部へかけてはゆるいふくらみをもって移行する。受部は平坦化し、外方へ引き出され、立ち上りとの境はやや凹むが不明瞭である。立ち上りは内傾しながら直線的に上方へのび、端部は丸くおさめる。器壁は薄く、体部下半は右方向のヘラ削り、内面にヘラ記号をもつ。

Ⅰｂ類（Fig.30－16）　底部は体部との境が不明瞭で、　ヘラおこし後静止ヘラ削りを行う。体部は深みをもってふくらむ。口径はⅠａ類より少くなり、受部の立ち上りとの境が少し凹む。立ち上りは上方へ引き出され端部は尖り気味となる。底部にヘラ記号をもつ。

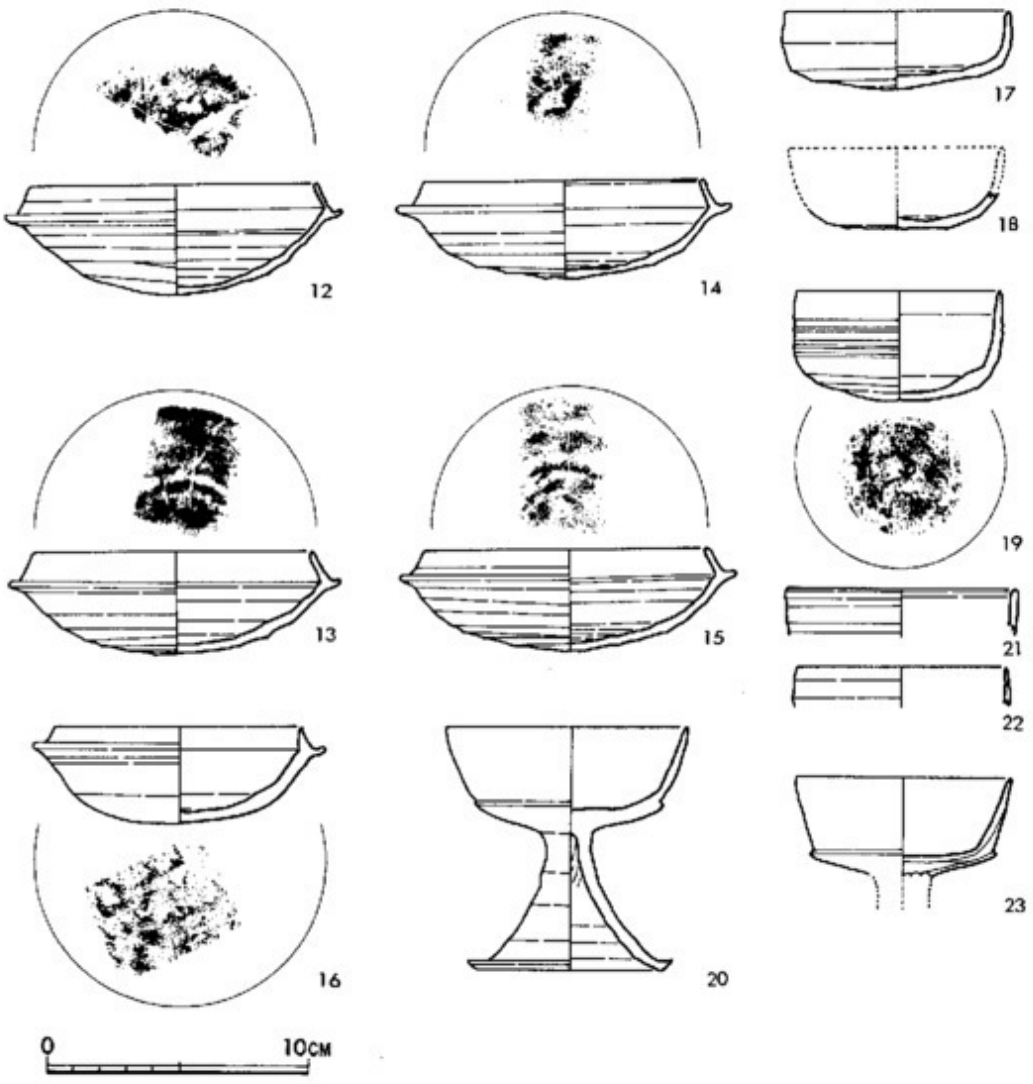


Fig.30　3号墳遺物実測図Ⅱ

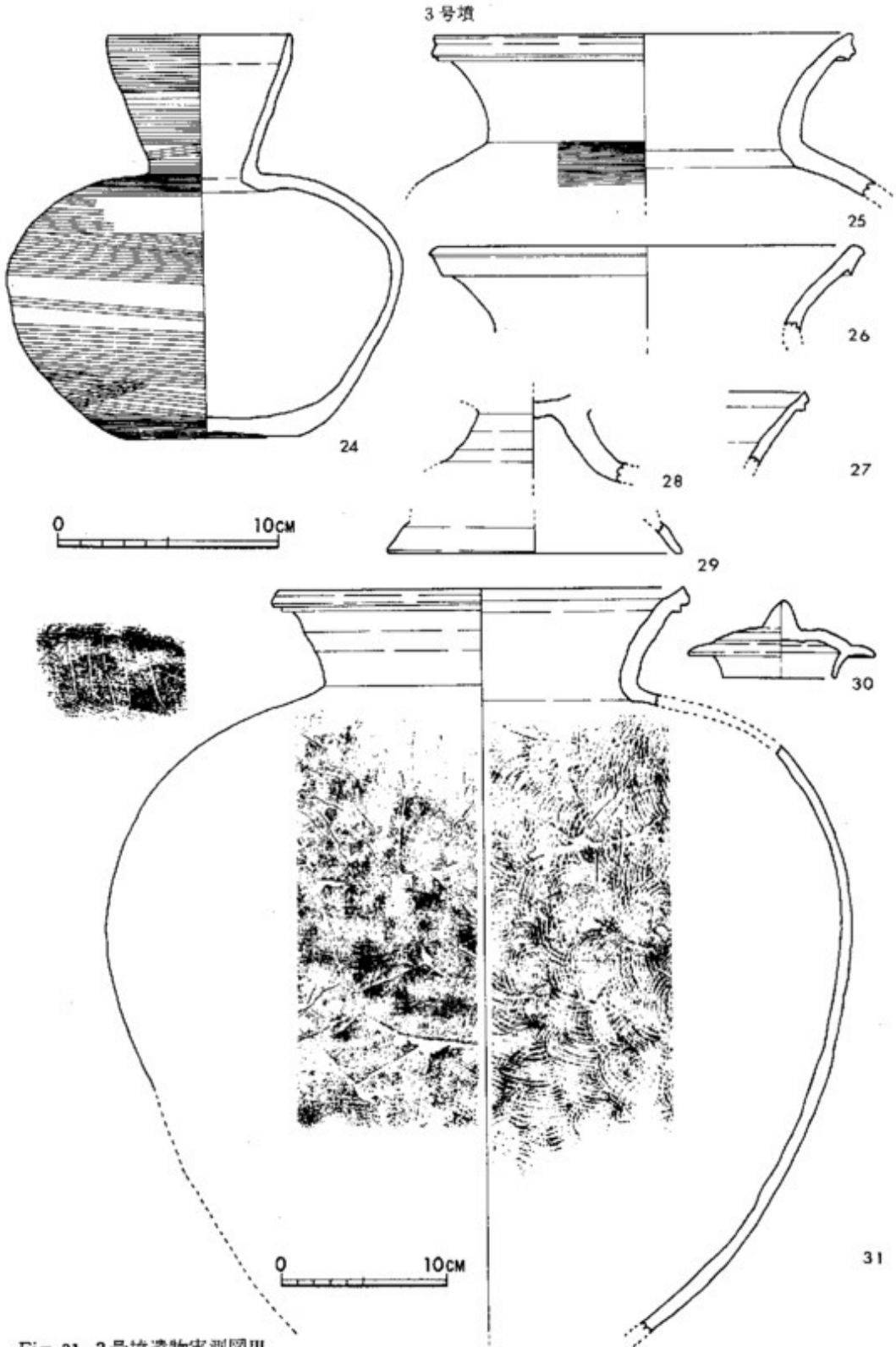


Fig.31 3号墳遺物実測図III

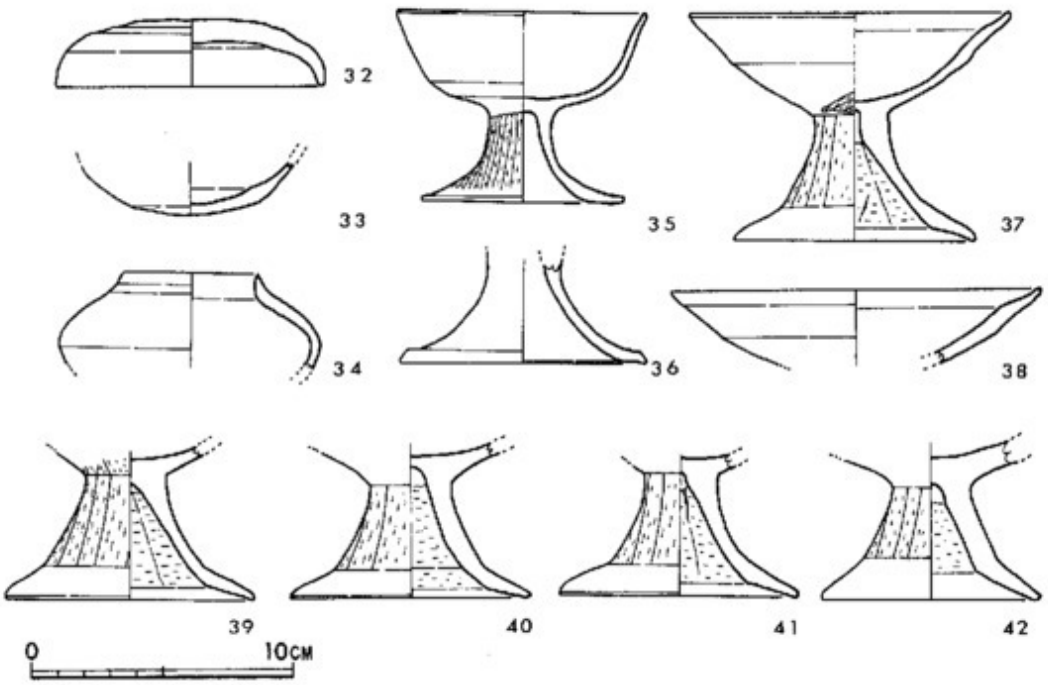


Fig.32　3号墳遺物実測図Ⅳ

Ⅱａ類（Fig.30－17）　口径に比べ器高が低く、体部から口縁部にかけて、やや内弯気味にのびる。口端部は尖り気味である。器壁は薄く、底部と体部との間はヘラ削りを行う。

Ⅱｂ類（Fig.30－18）　なま焼けで、器面が剥離している。器壁は薄く、底部から体部へはゆるやかにふくらみ、口縁部は上方へのびると考える。

Ⅱｃ類（Fig.30－19）　体部の器壁は薄く、上方へ引き上げられ、口端部は尖り気味である。体部上半に2条の沈線を施し、その下にカキ目調整がなされている。底部と体部の間はヘラ削り。

高杯（Fig.30－20～23）　4個体出土し、完形品は1個体である。

20は完形品である。器壁の厚い杯底部と体部との境は明確な段をもち、体部から口縁部にかけて内弯気味に外傾して立ち上り、口端部は尖り気味である。脚部は外反しながら下方へ開き、脚端部は上方へ引き出される。筒部にタテなで調整、裾部にカキ目の跡がみられる。脚内面にはしぼりの痕跡を残す。

21、22とも口縁部のみで、端部を丸くおさめるものと尖るものがある。23は杯部底と体部の境に段を有し、杯部は直線的に外傾し立ち上る。口端部は尖り気味におさめ、断面観察により粘土接合が判別できる。

直口壺（Fig.31－24）　完形品である。頸部から口縁部にかけて直線的に外傾して立ち上がり、口端部は尖り気味になる。頸部と体部の境で器壁は厚くなり、体部は大きくふくらみ、最大径は体部中央より上である。体部から底部へかけては直線的にすぼまり、底部と体部の境は丸味をもち、やや上げ底気味な底部となる。器面はカキ目調整で、内面は口頸部にナデ調整を行う。

甕（Fig.31－25～27、31）　25は頸部と体部の境は明瞭で、短く外反して立ち上り、口端部は丸く、直下に突帯がめぐる。口頸部はヨコナデ調整、体部外面は横方向のカキ目調整、内面は同心円文が残る。31は口頸部が外傾して立ち上り、口端下に段をもつ。胴部最大径は体部中央より上で、体部外面は左上りの格子目タタキとその上からカキ目状調整が上半部で明瞭、内面は上半部が同心円文、以下は平行タタキ文である。頸部にヘラ記号をもつ。26は口縁部のみで、直線的に外傾して立ち上がり、端部はコの字形で、端部下は段を有する。

脚付壺（Fig 31－28）　破片で杯部と脚部の境は明瞭で、器壁は厚く、体部内面、脚部内外ともナデ調整である。

脚（Fig.31－29）　全体の器形は明らかにはできない。端部は丸くおさめる。

壺蓋（Fig.31－30）　擬宝珠形のつまみをもち、受部は広く、かえりは内傾して下方へのびる。体部にはヘラ削りを施す。

土師器（Fig.32－32～42）　11個体出土し、4個体が完形品である。

蓋（Fig.32－32）　器壁は厚く、体部は内弯して下降し、口端部は丸い、体部と底部との間をヘラ削りしている。

椀（Fig.32－33）　底部から体部へかけて稜をもっ

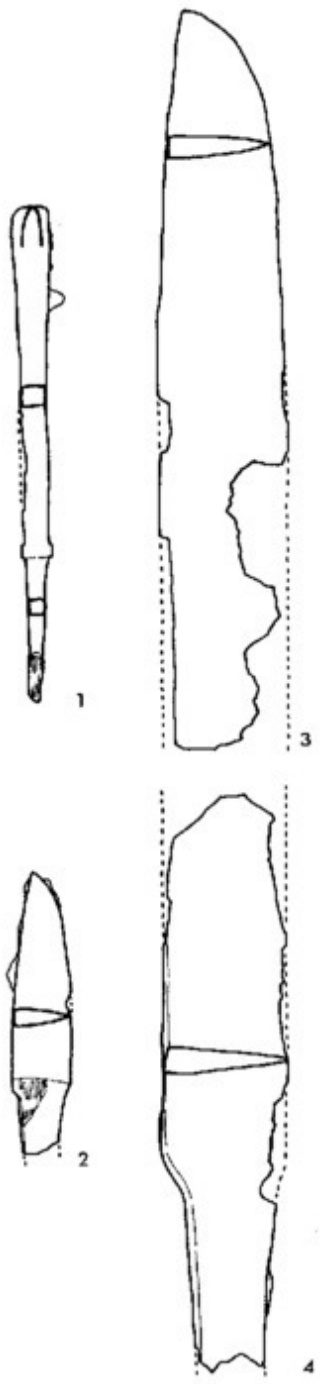


Fig.33　3号墳出土遺物実測図Ⅴ（1/2）

てふくらみ、器壁は薄い。

短頸壺（Fig.32－34）　口端部は尖り気味で、体部は下降気味のふくらみをもつ。

高杯（Fig.32－35～40）　35は外傾して立ち上り、口端部は丸い。杯部と杯底部の境は不明瞭である。脚部は外反して下方に開き、脚端部は少し下方へ引き出される。脚外面には縦方向のヘラ削りが施される。36は脚部のみで、外反して下方へ開き、端部は下方へ引き出される。37は内湾しながら上方へふくらみ、体部と口縁部との境に段がつき、さらに外反してまるみをもつ口端部へとのびる。脚は上半の器壁が厚く、外反して下方へ開き、裾部で屈曲し、丸い脚端部へのびる。杯部底はヘラ削り、脚部外面は縦方向のヘラ削り、内面は横方向のヘラ削り及びしぼりの跡が認められる。39～42は杯部下半から脚部の破片である。いずれも脚部外面に縦方向のヘラ削りと内面の横方向のヘラ削りとしぼりの痕跡を認める。（原）

鉄鏃（Fig.33－13）　ほぼ完形品の鏃である。茎部と身の間に棘状突起をもつ、断面長方形の身は先端に向って幅広くなり、両刃の頭部となる。茎部は断面方形で、下半部に木質部を遺存する。全長12.6㎝を計る。

刀子（Fig.33－2）　両関の刀子で茎部の先端を欠損している。身、茎ともに断面は二等辺三角形で、茎には木質が遺存する。

直刀（Fig.33－4）　保存状態は極めて悪く、身の中ほどで半折しているが、同一個体と考えられる鉄刀である。両関で身の断面は二等辺三角形、茎部は丸味をもつ逆台形である。

（松村）

Tab.3　3号墳出土土器計測表

	類	No.	口径	器高	かえり径	つまみ高	胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
杯蓋	Ⅰa	1	12.7	4.2			砂粒混	不良	青灰色	逆時計	○	墓道
		2	12.5	4.0			砂粒混	不良	青灰色	逆時計	○	墓道
		3	12.4	4.1			砂粒混	不良	青灰色	逆時計	○	墓道
		4	12.7	4.2			砂粒混	不良	暗青灰色	逆時計	○	4区
	Ⅰb	5	11.2	3.9			砂粒混	良	青灰色		○	墓道
	Ⅱa	6	13.3	3.6	11.2	1.4	砂粒多	良	青灰色	時計	○	墓道
	Ⅱb	7	8.8	2.1	6.9		砂粒多	不良	黒灰色			墓道
	Ⅱc	8	10.6	2.1	8.1	0.3	砂粒多	不良	赤褐色		○	墓道
		9	9.7	2.2	6.9	0.7	砂粒多	不良	赤褐色		○	墓道
	Ⅱd	10	9.7	2.4	7.9		砂粒混	良	セピア		○	墓道
	Ⅱe	11	9.5	2.2	7.1	?	砂粒多	不良	黄褐色			墓道
杯身		No.	口径	器高	受部径	立ち上り高	胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
	Ⅰa	12	11.0	4.3	13.0	1.0	砂粒混	不良	青灰色	逆時計	○	墓道
		13	10.7	4.0	12.8	1.1	砂粒混	不良	青灰色	逆時計	○	墓道
		14	10.8	3.8	13.0	1.0	砂粒混	不良	青灰色	逆時計	○	墓道
		15	10.8	4.0	13.1	0.9	砂粒混	不良	暗青灰	逆時計	○	墓道
	Ⅰb	16	9.4	3.8	11.3	0.8	砂粒混	不良	青灰色		○	墓道
	Ⅱa	17	8.6	3.1			砂粒混	良	黒灰色			墓道
	Ⅱb	18	(8.3)	(3.1)			砂粒多	不良	茶褐色			墓道
	Ⅱc	19	7.9	4.3			砂粒多	良	黒灰色		○	墓道
高杯		No.	口径	器高	脚端径	脚高	胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
		20	9.4	9.4	7.9	5.3	砂粒多	不良	黒灰色			墓道
		21	8.9				良	良	青灰色			1区
		22	8.0				良	良	暗セピア			1区
		23	8.4				砂粒混	不良	青灰色			墓道
壺		No.	口径	器高	体部最大径		胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
		24	8.3	18.3	18.1		砂粒混	良	青灰色			石室内
甕		25	19.0				良	良	セピア			3区
		26	20				砂粒多	不良	青灰色			1区
		27					砂粒混	不良	灰色			4区
脚		28					砂粒多	不良	青灰色			石室

	類	No.	口径	器高	脚端径	脚高	胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
脚		29			13.4		砂粒混	良	青灰色			1区
壺		No.	口径	器高	受部径	立ち上り高	胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
蓋		30	8.6	3.5	5.1	1.0	砂粒多	良	黒灰色			墓道
甕		No.	口径	器高	体部最大径		胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
		31	25.2		45.0		砂粒多	良	青灰色		○	墓道
土師器		No.	口径	器高			胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
蓋		32	10.3	2.6			砂粒多	不良	黄褐色			墓道
土師器椀		33					砂粒多	不良	赤褐色			墓道
土師器短頸壺		No.	口径	器高	体部最大径		胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
		34	5.1		10.1		砂粒混	不良	黄褐色			墓道
土師器高杯	類	No.	口径	器高	脚端径	脚高	胎土	焼成	色調	ロクロ回転方向	ヘラ記号	出土地点
		35	9.7	7.4	7.9	3.5	砂粒混	不良	赤褐色			墓道
		36			9.5		砂粒多	不良	赤褐色			墓道
		37	12.5	8.8	9.4	5.0	砂粒多	良	赤褐色			墓道
		38	14.3				砂粒多	良	赤褐色			墓道
		39			9.6	4.8	砂粒多	良	赤褐色			墓道
		40			9.3	4.3	砂粒多	良	赤褐色			墓道
		41			9.3	4.6	砂粒多	良	赤褐色			墓道
		42			8.5	4.2	砂粒混	良	赤褐色			墓道

第3章　総　　括

今回調査した3基の古墳は、下和白塚原古墳群を構成する一部である。塚原古墳群の存在は古くから知られていたが破壊が古く、その総数、内容等は明らかでない。今回の山ノ下支群の調査はこれらの欠を補い、塚原古墳群の形成過程について一つの手がかりを得ることができた。

3基の古墳は下和白の丘陵の南斜面に派生した支脈の一つに立地している。いずれも丘陵西斜面に構築されたもので、規模、構築技法には共通点が多い。また、古墳築造における第一段階の地山整形で切り合い関係にあるほど隣接しており、一つの墓域の設定があったことが予想され、これらを古墳群の最小単位と考え、塚原古墳群の中で山ノ下支群として位置づける。

以下、発掘成果を整理し、まとめにかえたい。

1．石室平面図形の検討

山ノ下支群の3基の古墳は、いずれも横穴式石室を埋葬主体としている。石室の保存状態は、すでに壁体上半部と天井部を失っていて良好でないが、石室平面形は比較的良好な状態で残っていた。以下、石室平面図形について検討し、構成と尺度の運用を推定し、石室の原企画を復元してみたい。

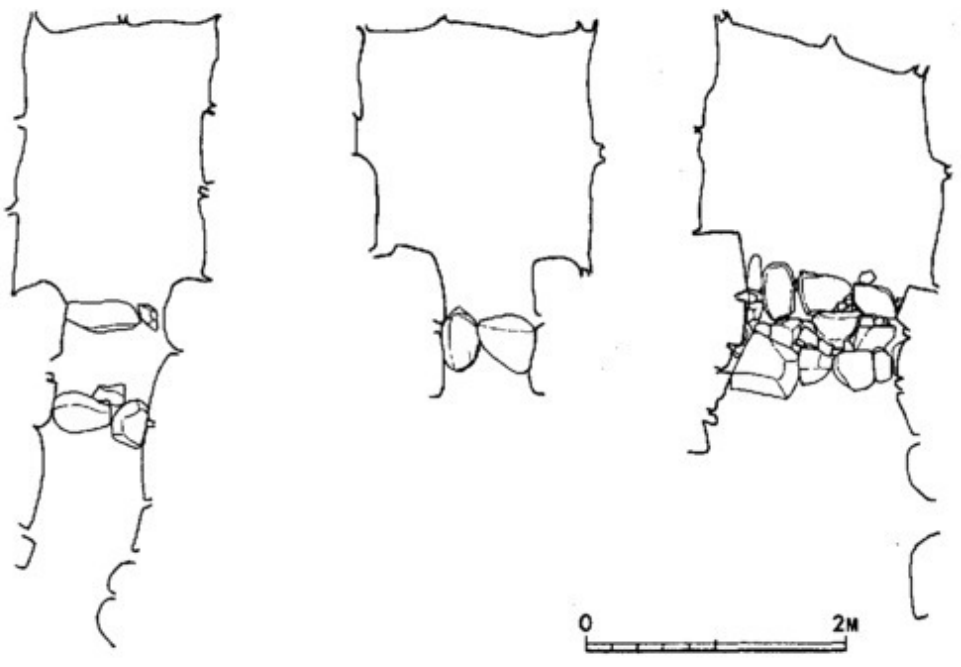


Fig.34 各古墳石室平面図

Fig.34に示した3基の石室平面形は2類型に分けられる。第1は狭長なプランの玄室に玄室長に等しい羨道を付すタイプで、2号墳がある。第2は方形の玄室プランに羨道を付したものであるが、羨道長の差異が大きい。1号、3号墳がある。それぞれをⅠ、Ⅱ類とする。

Ⅰ類型石室（2号墳）

玄室平面形は幅に対し長さが約2倍を有し、ほぼ同等の長さを有する羨道は玄室主軸より左にふれている。石室各部のデータは下記のとおりである。　（単位cm）

玄室長	右	196	玄室幅	右	148
	左	206		中央	138
				左	146

以上のデータから使用尺度を推定すると高麗尺（約35cm）では玄室長5.6～5.9尺、幅3.9～4.2尺に、また晋尺系尺（約24～26cm）では玄室長8.1～8.6尺、幅5.7～6.2尺に換算できる。

石室の壁線は若干のひずみを有するが、奥壁、側壁共に石室主軸に直交ないしは平行する。このことよりこれら壁線を基準にとりながら、前記2種の尺度方眼上で石室プランとの適合関係を検討すると、晋尺系尺の使用がFig.35のようにより妥当性をもつことが知られる。この操作よりみると石室幅は奥、前壁共に6コマをとり、左、右壁は方眼上では右壁は8コマを、左壁はひずみのため方眼と合致はしないが、隅角間は8コマを正しくとる。これは石材による誤差と考えることができる。袖幅は左右に若干の差がある。右袖が約1コマ、左袖が約2コマを

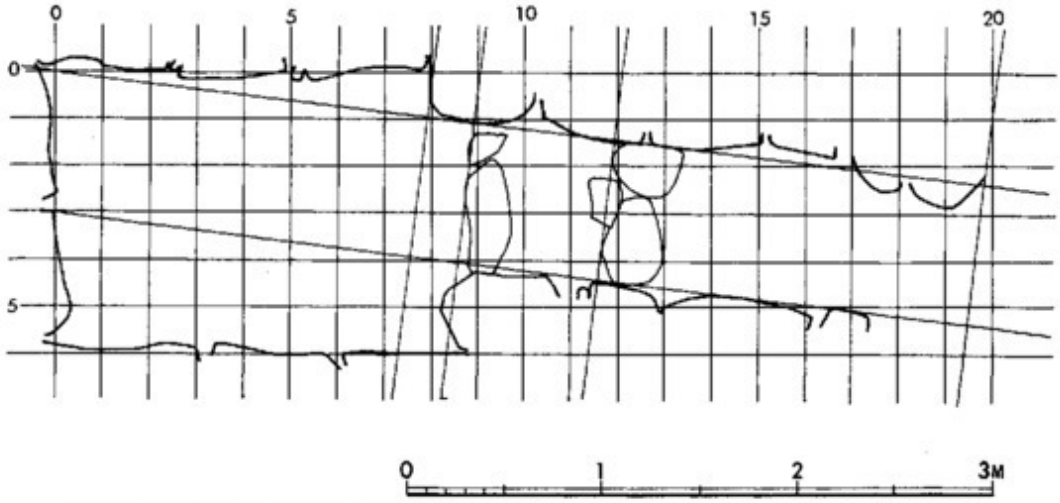


Fig.35　2号墳石室の方眼による操作結果

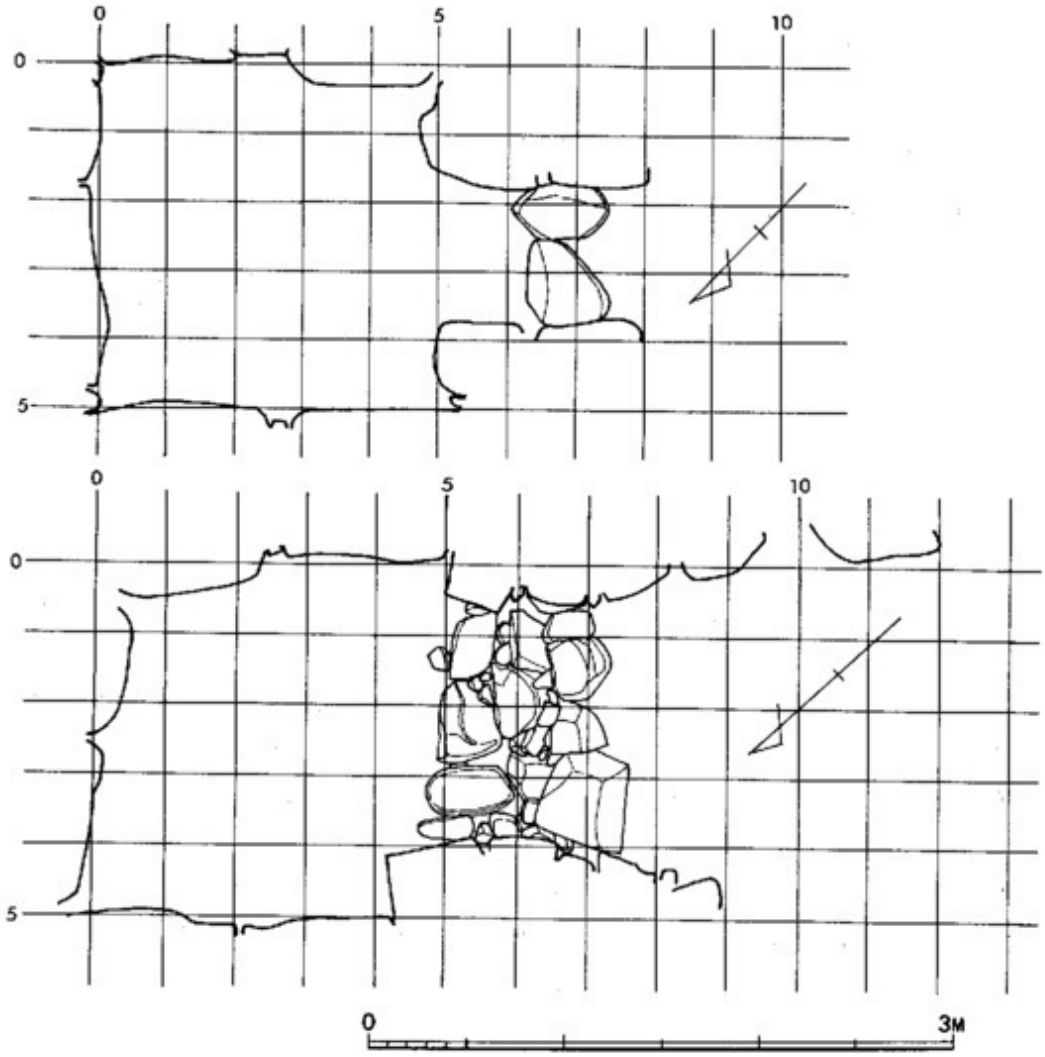


Fig.36　1、3号墳石室の方眼による繰作結果

とる。羨道部はその主軸線が玄室方眼の主軸から約7.5度南にふれているためよく適合関係を示さないが、そのブレを訂正した場合は適合関係は良い。すなわち、羨道幅は3コマをとり、第1、2梱石は玄室側に基準をもち、それぞれ右袖石角より4コマ、1コマをとり、第1～2梱石間は2コマをとる。また、羨道全長12コマをとる。玄室、羨道の主軸線のずれは単に石材や技術的誤差によるものでないことは、羨道壁線がそれぞれ奥壁の中心と奥壁と右側壁の隅角に一致することからもわかる。

以上から本石室の原企画は次のように復元できる。使用尺度は約24cmを1尺とする晋尺系の尺度と推定する。

石室長	20尺	羨道幅	3尺
玄室長	8尺	袖　幅 右	1尺
玄室幅	5尺	袖　幅 左	2尺
羨道長	12尺	第1～2梱石間	2尺

II類型石室（1、3号墳）

玄室が方形をなすもので羨道長は長短がある。石室各部のデータは次のとおりである。

（単位 cm）

		1号墳	3号墳
玄室長	右	164	174
	左	161	180
玄室幅	奥	160	176
	中央	184	188
	前	185	165

以上のデータから使用尺度を推定すると高麗尺（約35cm）では玄室長4.6～5.1尺、幅4.5～5.3尺に、また晋尺系尺（約24cm）では玄室長6.7～7.5尺、幅6.6～7.8尺に換算できる。

石室壁線は3号墳では奥壁、側壁共に石室主軸に直交ないしは平行で、1号墳は側壁は石室主軸に平行するが、奥壁は大きなひずみがある。このことより、壁線を基準にとりながら前記2種の尺度方眼上で石室プランとの適合関係を検討すると、高麗尺（1号墳は36cm、3号墳は35cmの方眼）の使用がFig.36のようにより妥当性をもつ。この操作より3号墳をみると石室幅は奥壁が正確に5コマをとり前壁は右壁腰石がやゝ張り出すが約5コマをとる。左右側壁は正確に5コマをとる。袖幅は左右に若干の差があるが、これは石材による誤差と考えられ、正しくは1.5コマをとったものであろう。羨道幅は2コマ、羨道長は3コマをとる。以上より、3号墳石室の原企画は次のように復元できる。使用尺度は約31cmを1尺とする高麗尺と推定する。

石室長	8尺	羨道幅	2尺
玄室長	5尺	羨道長	3尺
玄室幅	5尺	袖　幅	1.5尺

また、1号墳も同様の操作からみると、石室が大きくひずんではいるがよく適合関係がみられる。石室奥壁は4コマ半、前壁は袖石がずれているが、5コマをとる。左右壁は4コマ半をとる。右前隅角、左奥隅角に基準線が正確に一致することからみれば、玄室は5コマを基準としたプランが考えられる。袖幅は左が1コマ、右が0.5コマをとるが、右袖幅は正しくは1コマをとるつもりが、石材による制約のため生じた誤差と考えられる。羨道部は外に向って順次広がるタイプで、袖石部で約3コマ、墓道側は左壁の一部を失っているが復元すると5コマをとったものと考える。以上より1号墳の原企画は次のように復元できる。使用尺度は約36cmを1

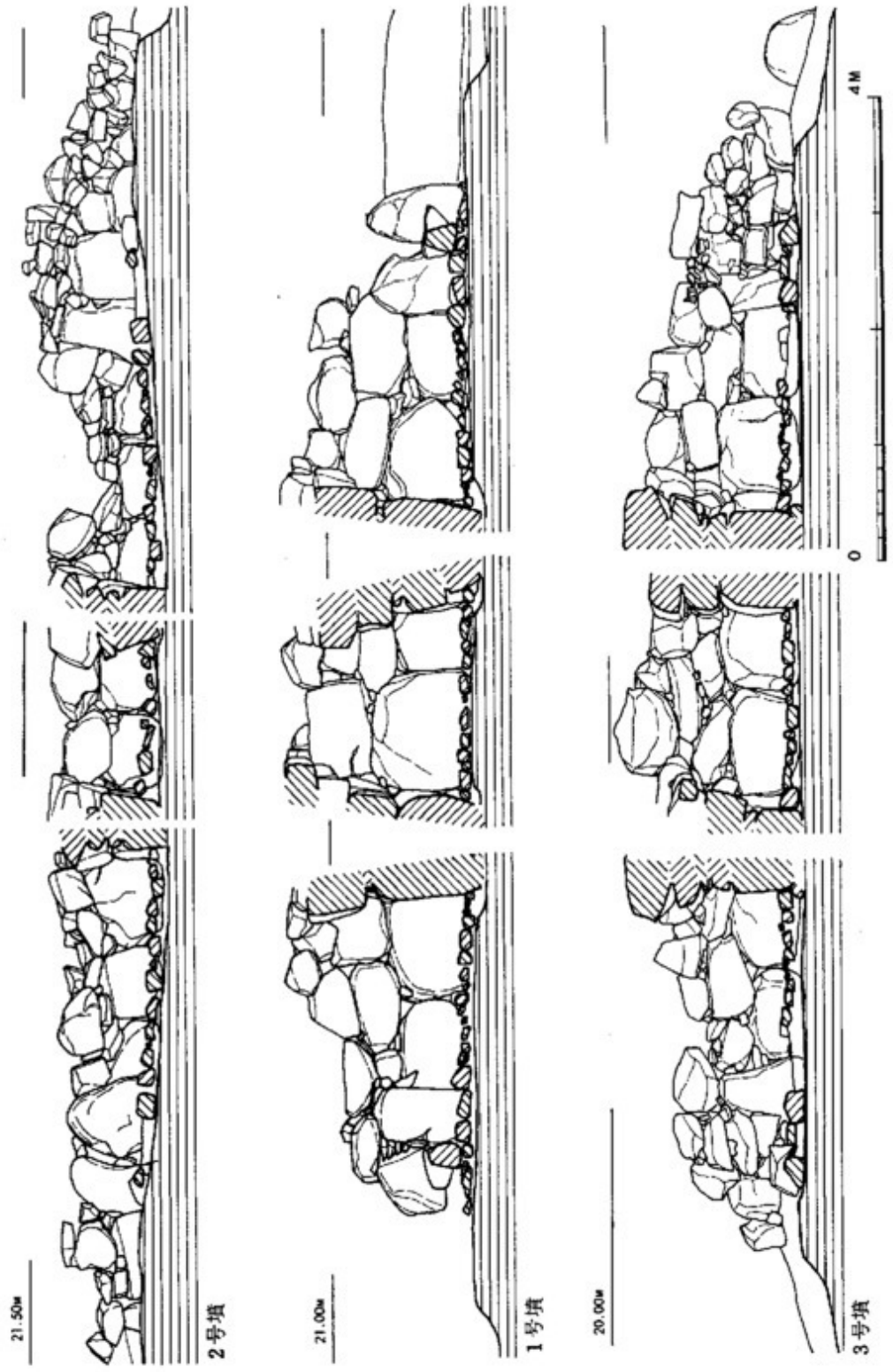


Fig.37 1～3号墳石積み状況一覧図

尺とする高麗尺と推定する。

石室長	12尺	羨道幅	3尺～5尺
玄室長	5尺	羨道長	7尺
玄室幅	5尺	袖　幅	1尺

（山崎）

2．須恵器について

本古墳群の須恵器は70個体で、このうち3基共出土するのは甕と杯で、形態的変化の最も現われやすい杯、杯蓋の42点について、その変遷について整理すると以下のようになる。

出土須恵器杯、杯蓋について形態差より、杯蓋の内面かえり、杯身の蓋受けのたちあがりの有無によりA、B類に大別し、さらに各部の形態より4類に細分した。

杯　蓋

A1類　口径12.4～12.7cm、器高4.0～4.2cm、器壁は薄く、天井部と体部の境は不明瞭で丸みをもった天井部からゆるやかにふくらんで下方にのび、口端部は丸くおさめる。天井部の½強が左まわりのヘラ削り調整、口縁部から内面はナデによる調整である。焼成はややあまい。

A2類　口径11.2cm、器高3.9cm前後で器壁はやや厚い。天井部は丸みをもち、体部との境は不明瞭、ゆるやかにふくらんで口端部を丸くおさめる。体部は口径に比して深みを有している。天井部は雑な静止ヘラ削りで、他の部分はナデ調整である。

A3類　前者よりも口径、器高とも小さくなり、体部から口縁部への移行は内湾しながら下方へ引き出される。天井部は未調整のままである。

A4類　口径10.3cm、器高3.4cm前後で、天井部は平坦面をつくり出し、体部との境は明瞭、器壁は厚く、体部から口縁部へゆるやかにふくらみ、端部は丸くおさめる。器面はナデ調整で天井部は

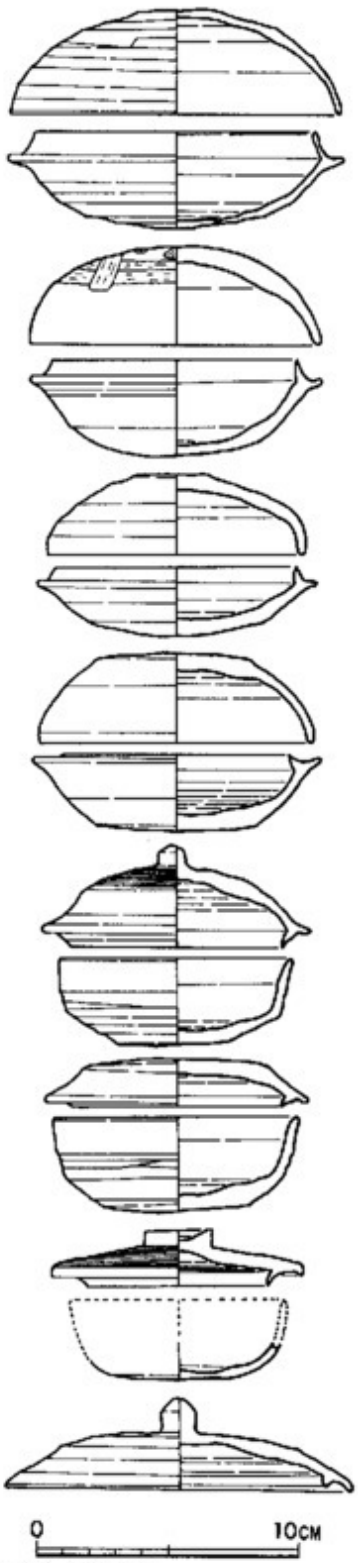


Fig.38 蓋、杯の分類

未調整である。

B1類　口径9.5～10.4cm、器高3.5～4.1cm、つまみ高0.9cm、疑宝珠形つまみを有し、天井部は丸みをもち、体部との境は不明瞭、受部端は丸く、受部幅は0.6cmとせまい。かえりとの間は丸く凹む。内面のかえりは外側にふくらみをもって段がつき、ここから下方へ外反し、端部は尖る。天井部に右まわりのヘラ削りを行うものと、さらにカキ目調整を施すものもある。

B2類　口径10.1～10.4cm、器高1.9～2.3cmで、器高が低くなり、天井部は平坦で、未調整、体部との境は明瞭である。体部は直線的にのび端部は丸くおさめる。内面のかえりとの間は丸く凹み、かえりは口端部よりやや下方に引き出され、内傾する。かえりは外側に段がつくものと、ないものがある。端部は尖る。天井部の調整は雑で、他はナデの調整である。宝珠形つまみをもつ。

B3類　口径9.7～10.6cm、器高2.1～2.2cm。つまみは中央がすり鉢状に凹み、輪状つまみに近い。天井部と体部の境は不明瞭、口縁部の外側に面をつくり、端部は下方へ引き出される。身受けは幅広く、内面のかえりは口端部より下方にのび、端部は尖る。天井部にカキ目調整を施す。なま焼けで赤褐色を帯びる。

B4類　口径13.3cm、器高3.6cm前後、疑宝珠形つまみを有し、天井部と体部の境は不明瞭である。体部は浅く、口端部は丸い。内面のかえりは短かく、口端部より内側にくる。天井部は左回りのヘラ削り。胎土、焼成とも良好。

杯　身

A1類　口径10.7～11.0cm。器高3.8～4.3cm。器壁は薄く、底部と体部との境は不明瞭である。底部から体部へは丸みをもって膨み、蓋受けの端部は丸く、受部幅は5㎜前後とせまく、立ち上がりは受部から0.9～1.1cmと高く、端部は丸い。天井部の½強に右回りのヘラ削り、セットとなる蓋との胎土・焼成は類似する。

A2類　口径9.4cm、器高3.8cm、A1類より小さくなり、底部と体部の境は不明瞭である。底部から体部へは深みをもって膨み、口縁部の端部は丸く、受部幅もせまい。立ち上がりとの間に小さな凹みをもち、立ち上がりは受部から0.8cmの高さで、端部は尖り気味、器壁はやや厚身となり、口径に比べて体部は深い。底部はヘラおこし後未調整。

A3類　口径9.3cm、器高2.7cm。A2類より小形化し、体部は浅く、受部面は平坦化し、幅もせまく、立ち上がりは受部から5㎜程で端部は尖り気味、底部はヘラおこし後未調整。

A4類　口径8.6cm、器高3.0cm、底部は平坦となり、体部との境は明瞭である。受部端は上方へ引き出され、立ち上がりは受部端から少し出る、端部は尖る。底部はヘラおこし後未調整。

B1類　口径9.0～9.5cm、器高3.0～3.9cm。底部は平坦化して、ヘラおこし後未調整。体部との境は明瞭となる。体部は小さく外反して立ち上がり、沈線をもつものともたないもの、あるいは体部にカキ目調整のみられるものがある。

B2類　口径9.5～9.6cm、器高3.7cm。形態、技法ともB1類に類似するが、口径・器高ともやや大きめである。セットになる蓋との胎土、焼成とも類似する。

B3類　底部から体部への破片であるが、器壁は薄く、底部から体部へは丸みをもって移行し、底部は平坦化している。

以上の分類からはA類からB類へ器形の小形化が認められ、特に身と蓋の逆転するB類では顕著になる。技法的にはA1類での回転利用のヘラ削りが見られる。

A1類の須恵器は器壁が薄く、成形、調整には丁寧さが見られる。本古墳群では最も古く位置づけられるものである。

B3類の蓋は、つまみの中央が凹むという特異な例であるが、口径や技法的には、B3類として押さえた。

B1類とB2類のセットは2号墳玄室からの同時出土であり、追葬による原位置の移動を考えるにしてもなお2分類には多少の疑問がある。A4類からB類への器形の変化、特にA4類での天井部（底部）の平坦化とかえりの高低から、B類のつまみの有無と器形の小形化、内面のかえりの高低の変化という図式には、多少の疑問点がのこされている。

以上本古墳群出土の須恵器を整理してみたが、留意すべきものに、1号墳出土の甕が2個体ある。2個体とも器形・技法には特色があり、朝鮮陶質土器との関連も考えられるが明確にはできない。（原）

3．ヘラ記号について

本古墳群出土の須恵器は70個体を数え、大部分は墓道からの出土である。これらの須恵器にはヘラ記号が見られるものがあり、特に杯蓋と杯に高い比率が認められる。このことは近年の福岡市内における古墳群の調査でも明らかになっている。ここでは本古墳群に見られるヘラ記号と上和白地区における古墳群出土の須恵器のヘラ記号について整理してみる。その際の数量化においては幅をもたせなければならない（ヘラ記号の番号は遺物実測図の番号に一致する）

1　号　墳

12個体中の4個体（33.3%）にヘラ記号が見られ、杯蓋、高杯、甕、甕にある。

2は天井部と体部の境に記され、胎土、焼成、記号の形態は2号墳18に類似する。4は高杯脚部内面に刻まれたキ印である。脚首の方から据へ右カーブに縦線を引き、直交するように横線2本を引いている。8は底部外面中央にV字を2本で切り合い関係をもって引かれている。10は頸部外側に左から右斜め下方へ引かれ、途中で屈曲してさらに右斜め下方へのび、その後に横方向の線が1本横ぎる。

2　号　墳

27個体の出土例の内、14個体（51.8%）にヘラ記号が見られる。杯蓋と高杯にあり、特に

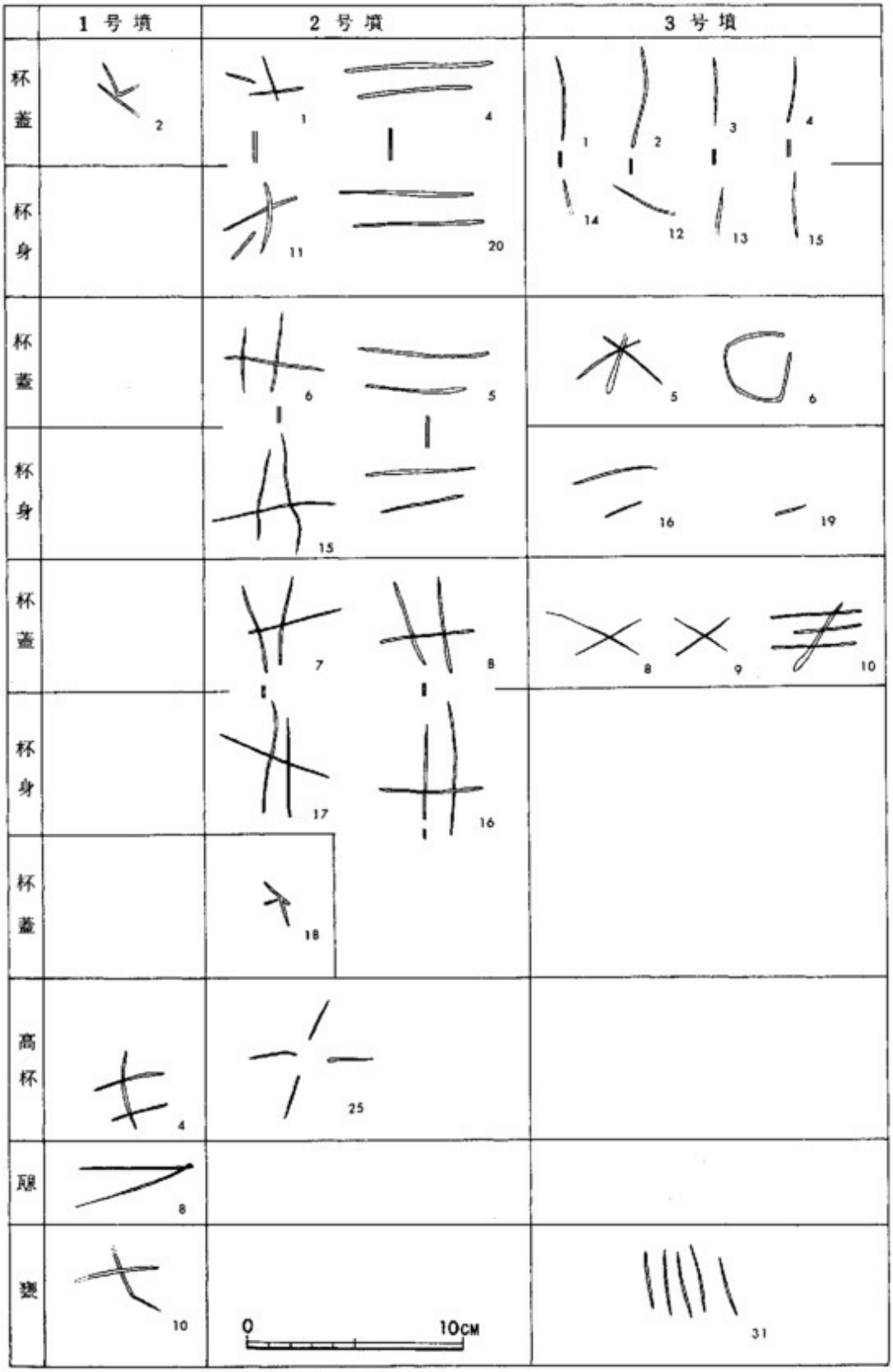


Fig.39 1～3号墳出土須恵器ヘラ記号

杯蓋では66.6%に　杯では63.6%に見られる。

1と11は胎土・焼成とも類似し、ヘラ記号も天井部（底部）中央から少しはずれたところに3本の線をもって記され、内2本は先後関係をもって交差する。4と20、5と19は互いに同一ヘラ記号をもち、胎土・焼成ともに類似する。天井部（底部）に2本の平行線を用い、長くて、太い方は中央を横切っている。6と15、7と17、8と16は互いに同一ヘラ記号をもち、胎土・焼成ともに類似する。記号の位置は、蓋は天井部下半から口縁部にかけて、杯は底部に描き、3本の線を用いて、平行線のあとに直交するように1本の線が引かれる。セット関係でのヘラ記号のクセはよく似ている。18は1号墳2との類似が見られるもので、記号の位置・形態は類似する。25は高杯の脚部内面に四方に広がる記号で、同墳出土の他の高杯とは胎土・焼成が異なる。

3　号　墳

31個体中の16個体（51.6%）にヘラ記号が見られ、杯蓋に81.8%、杯に75%ある。他には甕がある。

1～4はそれぞれ、14・12・13・15とセット関係にあり、セットでの胎土・焼成とも類似する。記号は蓋・杯ともに内面の中央から少しはずれたところから口縁部へかけて引かれており、セット関係での記号のクセには共通点が見られる。5は内面の中央から少しはずれたところに3本の線が交差し、互いに先後関係をもって引かれている。16は底部外面中央を少しずれたとこ

Tab.4　山ノ下支群における須恵器とヘラ記号の割合

	1　号　墳	2　号　墳	3　号　墳	計
杯　蓋	3・1（33.3）	9・6（66.6）	11・9（81.8）	23・16（69.5）
杯　身		11・7（63.6）	8・6（75.0）	19・13（68.4）
高　杯	1・1（100.0）	2・1（50.0）	4・0　（0）	7・2（28.5）
脚	2・1（50.0）			2・1（50.0）
平　瓶	1・0　（0）			1・0
壺　蓋		1・0　（0）	1・0　（0）	2・0　（0）
直口壺			1・0　（0）	1・0　（0）
短頸壺		2・0　（0）		2・0　（0）
壺	1・0　（0）			1・0　（0）
甕	4・1（25.0）	2・0　（0）	4・1（25.0）	10・2（20.0）
脚			2・0　（0）	2・0　（0）
計	12・4（33.3）	27・14（51.6）	31・16（51.6）	70・34（48.5）

数字は左から、出土数・ヘラ記号数・百分比

ろに、長短２本の平行線が引かれている。６は内面のほぼ中央に円形に刻まれる。８と９は細い×印で互いの記号化の順序は逆である。10は天井部中央に１本の斜線と３本の平行線が交差する。19は底部中央をずれたところに１本の線で引かれる。31は甕の頸部に縦に５本の線で刻まれる。

以上は本古墳群でのヘラ記号であるが、次にその主要な点をあげると以下の如くである。

①３基の間には個体数のバラつきがあるが総個体数の48.5%と高い比率で存在し、特に、杯蓋では69.5%、杯では68.4%とさらに高い比率である。

②杯蓋と杯のヘラ記号を同じくするものが10セットあり、２号墳では５セットが玄室での出土である。

③３号墳では内面にヘラ記号が見られるものがあり、杯蓋と杯で４セットになる。

④記号は直線を基本としており、１～４本が見られ、平行するものと、交差するものがある、記号そのものは他の古墳群にも見られるように一般的である。

上和白地区古墳群のヘラ記号について

1970年度に上和白地区において９基の古墳が調査されており、出土する須恵器の中にはヘラ記号をもつものがあり、報文と実見できる範囲で整理してみる。丘陵の北側に位置して、古く位置づけられる猿の塚古墳があり、ここから南へ向かって丘陵西側斜面に宮の前古墳群、高見Ａ群、高見Ｂ群と古墳群がつづく。須恵器にヘラ記号をもつものは８基であり、全体では杯蓋の30.6%にヘラ記号が見られ、高見５号墳は卓越している。記号はほとんどが、天井部(底部)外面に付されるが、高見２号墳に７個体、高見５号墳に９個体の内面ヘラ記号が認められる。

高見２号墳の内面ヘラ記号をもつ杯蓋、杯は、３つがセット関係をもち、それぞれ×・‖・小の記号をもち、セット関係での胎土・焼成・技法は類似する。

高見５号墳の内面ヘラ記号をもつものは、３つにセット関係をもっており、いずれもΩの記号をもち、胎土・焼成・技法とも類似する。

この地区でのヘラ記号は山ノ下支群と同様に杯蓋、杯に高い比率を示しており、同一ヘラ記号は同じ位置に、同じ形を刻み、胎土・焼成・技法とも似るものが９セット見られる。記号化は直線と曲線を用いた通有のものであり、形態も一般的である。内面ヘラ記号をもち、セット関係をもつ、高見２号墳、高見５号墳、山ノ下３号墳の間での比較では類似点は出てこず、内面ヘラ記号を窯跡での関連として把えることはできなく、また、その位置づけも資料不足である。

山ノ下支群と上和白地区９基の古墳の間では、窯を同一とする明確な資料は得られず、将来窯跡との調査と合わせて再考する必要がある。　(原)

Tab.5　上和白地区古墳群の杯蓋・杯に見られるヘラ記号　（上から、出土数、ヘラ記号・%）

	高見2号墳	高見3号墳	高見4号墳	高見5号墳	宮の前1号墳	宮の前2号墳	宮の前3号墳	狼の塚古墳	計
杯蓋	10	4	2	13	17	6	4	8	54
	5	2	2	7	1	1	1	0	19
	50.0	50.0	100	53.8	14.2	16.6	25.0	0	35.1
杯	15	17	6	11	4	5	15	7	70
	4	2	0	10	1	0	0	2	19
	26.6	11.7	0	90.9	25.0	0	0	28.5	27.1
計	25	21	8	24	11	11	9	15	124
	9	4	2	17	2	1	1	2	38
	36	19.0	25.0	70.8	18.1	9.0	11.1	13.3	30.6

4．古墳群の築造年代と性格

前節において石室の平面図形、出土須恵器について検討してきたが、ここで古墳の築造年代と古墳群の性格（主に経済的基盤）について検討を加える。

調査した3基の古墳は、横穴式石室の構造と出土須恵器との対照によって、その築造年代が6世紀後半から7世紀初めと推定される。また、発掘調査の結果からは地山整形段階に相互に切り合い関係があり古墳築造の先後関係がわかる。すなわち、1号墳は地山整形時に2号墳墳丘を一部切り、また3号墳も同様に2号墳を切っており、3基の中で2号墳が最も先行して築造されたことがわかり、石室形態からも傍証される。1、3号墳は石室形態が類似していて近接した築造年代が推定できるが、1号墳は石室のひずみが大きく3号墳と比較しやゝ後出の感を受ける。須恵器からみても明らかに3号墳が先行する。調査した3基の古墳の築造順は2号墳→3号墳→1号墳となるが、3、1号墳は近接した築造年代が与えられる。最近の須恵器編集の成果や石室平面図形の成果から3基の築造年代を推定すれば、2号墳が6世紀第4四半世紀の初め頃、3、1号墳は7世紀を前後する時期の築造が考えられる。

また3基の古墳は共に追葬が行われたのは出土須恵器の変遷からみて容易に推測がつく。3号墳に1点ではあるがⅥ期の須恵器1点があり、最も後出するものものであるが、1、2号墳は共にⅤ期の須恵器が最も後出するものである。1～3号墳における追葬はⅤ、Ⅵ期の時期に終了している。また、これら3基の古墳は、同一の墓道にそって形成されていることは、同一家族における累積的な造墓活動を現出していると考える。

次に、これら古墳群の築造の背景である経済的基盤、すなわち被葬者の性格について検討してみよう。

塚原古墳群は破壊時期が古く、総数は明らかでないが、山ノ下支群の状態からみて10数基よりなる小単位の古墳群とみることができる。周辺には後期古墳として三苫、経塚、飛山３号、中和白、丸山、猿ノ塚、宮前、高見、平山古墳群などが散在するが、福岡の平野部に面した油山や持田ヶ浦の古墳群に比較すると、古墳の規模、数は極めて劣勢である。

山ノ下支群の周辺部は可耕地としての平野を欠いており、その経済的背景を農業生産力にもとめることは不可能である。今回調査した和白地区も含め、志賀島から宗像にかけての海岸部に立地する遺跡は極めて漁海性が強い。農業伝来以降の弥生、古墳時代になっても夜臼、須郷、鹿部、立花等の小規模な貝塚が形成されていることはその証左であろう。

塚原古墳群山ノ下支群に眠る被葬者の居住地は明らかでないが、周辺の海岸部にその居住地が想定されることは、その被葬者が漁海的性格を具備していたと思われる。換言すれば、被葬者は漁業集団の突出した人々と考えることができる。１号墳より出土した陶質土器に類似した土器は、こうした中ではじめて理解できるものであろう。（山崎）

図　版

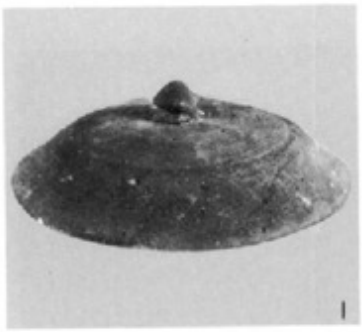
PLATES

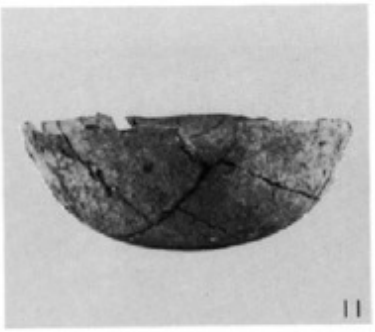
PL.1　① 古墳群全景（発掘前）　② 古墳群全景（発掘後）　③ 1、2号墳

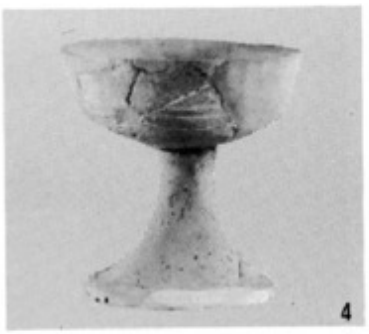
PL.2　①1号墳全景(墳丘遺存状態)　②1号墳墳丘断面　③1号墳地山整形と石室

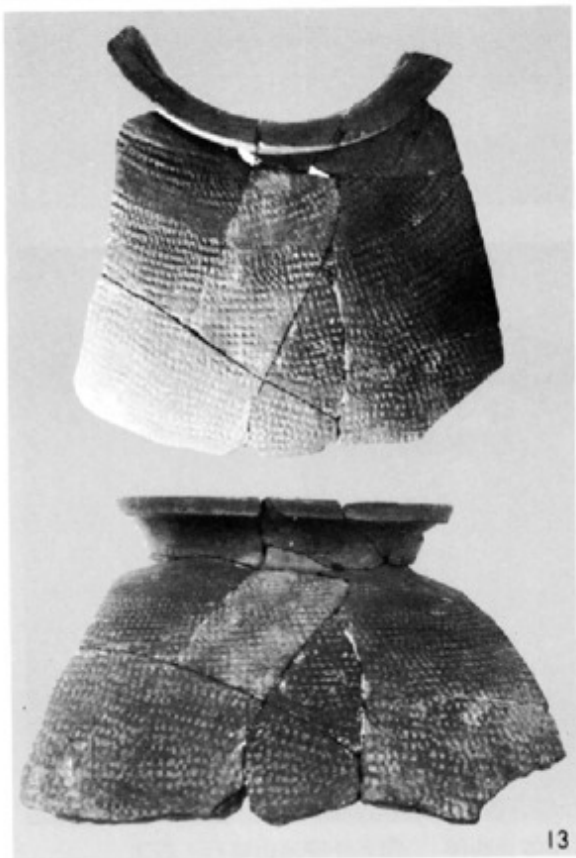
PL.3　①1号墳石室と閉塞状況　②1号墳閉塞部(墓道側から)　③1号墳閉塞部(石室側から)

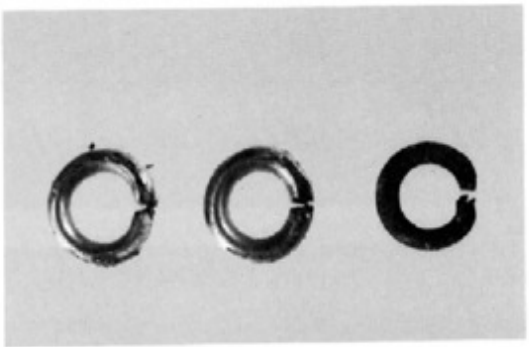
PL.4　①1号墳石室と羨道　②1号墳石室奥壁と床面　③1号墳遺物出土状況











PL.5　1号墳出土遺物

PL.6　①２号墳全景(墳丘遺存状態)　②２号墳墳丘断面　③２号墳地山整形と石室

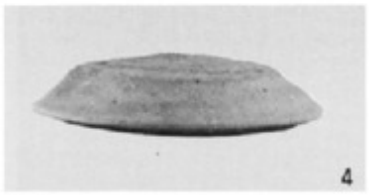
PL.7　①２号墳石室と閉塞状況　②２号墳閉塞部（墓道側から）　③２号墳閉塞部（石室側から）

PL.8　①２号墳石室全景（羨道側から）
②２号墳石室全景（後方から）
③２号墳石室奥壁
④２号墳石室内遺物出土状況

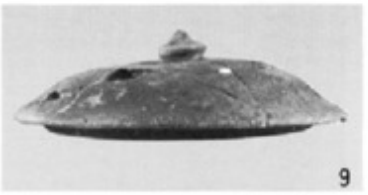
5

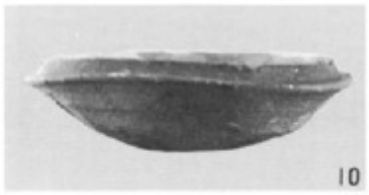
6

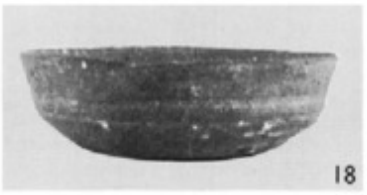
8


4

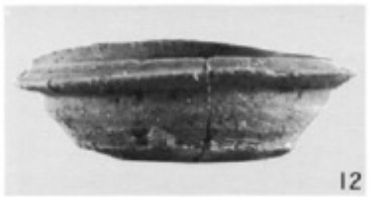
7

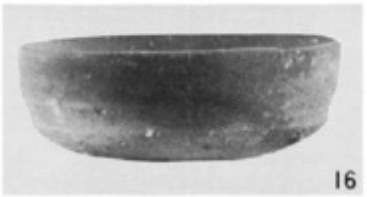

9


10

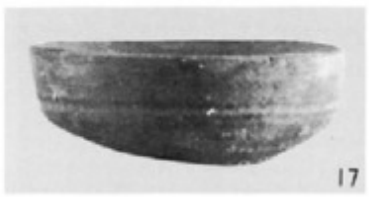

18

15


12


16

19


17

14

20

23

24

25

27

PL.9　2号墳出土遺物

PL.10　①３号墳全景（墳丘遺存状態）　②３号墳墳丘断面　③３号墳地山整形と石室

PL.11 ①3号墳石室全景　②3号墳石室床面　③3号墳石室奥壁
④3号墳石室と墓道(墓道側から)　⑤3号墳石室と墓道(後方から)

PL.12　3号墳出土遺物

福岡市東区下和白

下和白塚原古墳群

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第55集

1980年　3月31日

発　行　　福岡市教育委員会
　　福岡市中央区天神1－8－1

印　刷　　祥文社印刷株式会社
　　福岡市博多区博多駅南4丁目15-17

福岡市教育委員会
No. 528
52. 8. 20
埋蔵文化財センター